大阪大学大学院人間科学研究科
附属 未来共創センター

年次報告書 2024
Annual Report 2024

未来共創センターとは？

人間科学部は、人間についての理解を深め、人間とは何かという根本的課題と人間が営む現代社会の多様な課題を総合的・学際的に探究し、時代の要請に応えることのできる新しい学問分野の創造を目指して、昭和47年（1972年）に、「人間科学」の名称を掲げる日本での最初の学部として創設されました。人間科学部・研究科の掲げる「現場に寄り添い、課題を探り、その課題解決に向けた学際的な視点からの研究活動の成果」を学内外に発信しながら、人間科学研究科と外部の結節点となることを目指した附属未来共創センターが2016年４月にスタートしました。研究科内の教員、学生の多様な出会いと連携を生み出し、新たな学問領域の開拓を支援することも、当センターの目的です。そして、これらの活動を通して、学部学生・大学院生に向けて多様な学びの場を提供することも目指しています。さらに、2017年度からは OOS（大阪大学オムニサイト）協定を軸とする社学連携活動も開始し、2024年度では24の協定が結ばれています。これまでのセンターの活動が、「研究成果の社会発信」を主に目指すものとするなら、OOS による連携・協働活動は、「社会の諸アクターとの協働を通じた共創知の創出」を試みるものです。OOS が創出する様々な「場」で人々が出会い、共感し、共生の輪が広がることを目指しています。

多様な活動を通して社会への貢献をめざします

オリジナリティあふれる多様な活動を発信し社会貢献をめざしています。

◇人間科学セミナー／出張授業

大学内で、または大学の外で、人間科学の教員が研究成果を発信するセミナーや講義をしています。

◇『シリーズ人間科学』の発刊

研究内容を一般にも分かりやすく発信する本として、人科の教員がテーマに合わせて共同で執筆しています。これまでに「食べる」「助ける」「感じる」「学ぶ・教える」「病む」「越える・超える」「争う」「住む・棲む」の８冊が発刊されています。

◇ジャーナル『未来共創』の発刊

最新の研究や活動報告をまとめたオンラインジャーナルを、年１回発刊します。

◇研究会の運営

年間のテーマを定めた研究会を実施しており、2020年度は「レジリエンス」、2021年度は「教育と格差」、2022年度は「人口減少への共創的アプローチ」、2023年度は「学際的研究として挑む「月経」」、2024年度は「「社学共創」への共創的アプローチ」をテーマに、多分野の教員・学生が議論を重ねました。この研究会からの成果は特集論文として、ジャーナル『未来共創』を通じて発信しています。

大学らしい「共創の場」から共創知をうみだします

大学における学びや研究を充実させ、多様なアクターとともに新しい「知」をうみだします。

◇ OOS 協定

産官社学連携により、人間科学の教員とパートナーとともに、学内外のセミナーやイベントの「場」、企業・財団・社団・地方自治体・NPO/NGO などの活動の「場」を支援・活用し、共創知をうみだします。

◇オープン・プロジェクト

学系間および他部局との協働を推進し、本研究科と社会の結節点としての社学共創活動を展開することにより、共生社会実現に向けての実践的な教育活動を図るために設置されました。現在、26のプロジェクトが展開され、さまざまな社会との結び目をつくり、あたらしい場をつくっています。

◇学生プロジェクト

学生の自由で、独創的な発想に基づく学際性のある社会との共創的なイベント、活動を支援しています。学系を超えた交流会の開催など、学生ならではのプロジェクトが展開されています。

目　次

はじめに ……1

I　未来共創センターの概要

1 設立の経緯と背景 ……2
2 活動目的と概要 ……3
3 運営体制 ……3

II　活動報告

1 センター主催のイベント
1.1　人間科学セミナー……4
1.2　学生企画によるプロジェクト ……14

2 大阪大学オムニサイト協定 OOS
2.1　OOS 協定先……19
2.2　OOS 関連イベント……20
2.3　OOS シンポジウム……22

3 オープン・プロジェクト
3.1　オープンプロジェクトの活動 ……25

4 研究事業
4.1　研究会 ……42
4.2　ジャーナル『未来共創』の発刊 …43

5 教育事業
5.1　未来共創センター担当授業 ……44
5.2　『私の一冊』の発刊 ……44

6 その他の活動 ……45

III　OOS 協定活動からのお知らせ

朝日新聞
「大学 SDGs ACTION! AWARDS 2025」で
オーディエンス賞を受賞……47

はじめに

未来共創センターの 2024 年度の活動をご報告します。

センターでは、2023 年度（令和 5 年度）以降、大阪大学の OU マスタープラン実現加速事業である「誰もが生きがいを育むことのできる共生社会をめざして：OU 版社学共創エコシステムの構築」（通称 Project IMPACT）の支援を受けて、IMPACT オープンプロジェクトを中心に社学共創活動の一層の推進に取り組んできました。2024 年度は、オープンプロジェクトの数はさらに増加しました。OOS 協定については、担当教員の退職による減少が見られた一方、新たな参入もありました。今後は、Project IMPACT を通して、こうした社学共創活動の成果をわかりやすく可視化して、研究科として社会に発信していくことに、センターも貢献していきたいと考えています。

2024 年度はセンター長をはじめスタッフの大きな入れ替わりもある中、実施事業の効率化なども模索してきました。年次報告の冊子印刷廃止もその効率化策の一つです。

社会における大きな事件や変動は、私たちに大きな不安や悲しみをもたらします。未来共創センターの種々の取り組みは、そんな不安や悲しみに対して、未来に向けた光を掲げることである。それがセンターの先達たちから受け継いだ気概です。実際、例えば、セミナーや研究会で議論を交わす時間や、OOS シンポジウムにてたくさんの組織の方々と語らう時間には、たしかに未来への希望がありました。

状況に合わせて形は変えつつも、センターの本質は見失うことのないよう、大学と社会との接点を維持し、より充実したものとしていくことに次年度も取り組んでいきたいと考えております。お気づきのことがあれば、ぜひご意見をいただければ幸いです。

附属未来共創センター
センター長　西森　年寿

Ⅰ　未来共創センターの概要

1　設立の経緯と背景

人間科学部は、人間についての理解を深め、人間とは何かという根本的課題と人間が営む現代社会の多様な課題を総合的・学際的に探究し、時代の要請に応えることのできる新しい学問分野の創造を目指して、昭和 47 年（1972 年）に、「人間科学」の名称を掲げる日本での最初の学部として創設されました。4 年後には大学院も設置され、当初から設置されている人間科学専攻（ 4 学系：行動学系、社会学系、人間学系、教育学系）と 2007 年に大阪大学と大阪外国語大学の統合によって設置されたグローバル人間学専攻（ 1 学系：グローバル人間学系）の 2 専攻 5 学系体制で、教育研究を展開してきました。

しかしながら、現代社会の急激な構造変動とそれに伴う人間生活の本質的な変化の中で、人間科学部・研究科が創設以来、最重要視してきた「自らの専門領域を深化させながら、俯瞰的な視点を持って、異なる学問領域との多様な連携と融合を実践する学際的な教育・研究活動」をさらに推し進めなければならないと認識するに至りました。そこで、2016 年に本研究科では従来の 2 専攻 5 学系体制から、1 専攻 4 学系体制に改編することを決定しました。具体的には、人間科学専攻のなかに、行動学系、社会学・人間学系、教育学系、共生学系の 4 学系としました。

新組織としての人間科学専攻には、新しい学問領域としての「共生学」が加わりました。今日の多様化する社会においては、紛争、大規模災害、環境汚染、貧困、高齢化、格差などあらゆる問題が生じ、人々の間に、あるいは社会に様々なレベルでの軋轢を生みだしています。それゆえに、「人種、民族、言語、宗教、国籍、地域、ジェンダー、セクシュアリティ、世代、病気・障がいなどの違いを有する人々が、その違いを認めながら、共に生きること」である「共生」を学際的に研究する「共生学」の構築を、本研究科は目指すことになりました。

本研究科は、従来から、国内外の大学や研究機関との国際共同研究や、学内の他部局との共同研究を積極的に展開し、「現場に寄り添いながら、文理融合的で学際的な研究活動」を展開してきました。この機能を一層強化するため、2016 年の新体制への移行に際して、本研究科と大阪大学他部局、国内外の大学・研究機関、NPO・NGO 等多様な団体、さらには市民社会をつなぐ「結節点」として、本研究科内に「未来共創センター」が設置されました。

そして 2022 年には、人間科学部は創立 50 周年を迎えています。

大阪大学大学院人間科学研究科
附属 未来共創センター

2　活動目的と概要

本センターは、本研究科教員の個別の学問領域における研究の機能強化だけでなく、異なる研究領域の研究者との接触や協働を通して、新たな融合的学問領域の展開と、国内外の現場に寄り添った実践的な教育研究活動の実現を目指します。

学部学生や大学院生は、本センターが企画・運営する公開講座、セミナーや研究会、さらに学術図書の企画・出版等の事業に参加することや、センターに関わる各種のプロジェクトの企画運営に参画することで、研究成果の一般社会への還元方法やコミュニケーション力・対話力の向上、及びプロジェクトの企画・運営能力などの実践的能力を身に着けることが期待できます。さらに、2017 年度からはOOS（大阪大学オムニサイト）協定を軸とする社学連携活動も開始し、「社会の諸アクターとの協働を通じた共創知の創出」を目指しています。

3　運営体制

《未来共創センター構成員》

未来共創センター

西 森　年 寿 教授［センター長］（兼）
山 中　浩 司 教授［副センター長］（兼）
澤 村　信 英 教授［副センター長］（兼）
杉 本 めぐみ 准教授
勝　　野吏子 講師（兼）
髙 田　一 宏 教授（兼）
白 川　千 尋 教授（兼）
稲 場　圭 信 教授（兼）
磯 島　浩 貴 特任研究員

未来共生イノベーター博士課程プログラム部門

伊 藤　莉 央 特任助教

Ⅱ　活動報告

1　センター主催等のイベント

◆1. 1　人間科学セミナー

大阪大学人間科学研究科の教員らによるセミナーで、一般にも広く公開しています。今年度は、第 65 回から第 84 回までの 20 回のセミナーが開催されました。

日付	時間	タイトル	講演者	場　所
2024 年 4 月 25 日 5 月 23 日 6 月 27 日 7 月 18 日 9 月 12 日 10 月 21 日 11 月 14 日 12 月 19 日 2025年 1 月 21 日 2 月 20 日	16:00－ 17:10 他	第65, 66, 68, 70, 73, 75, 76, 77, 78, 81回 人間科学セミナー 行動学系若手セミナーシリーズ（回によってはFDセミナーとして開催）	設樂　哲弥 大江龍太郎 松井　　大 石川　萌子 胡　　毓瑜 米田　　翼 温　　若寒 伊藤　篤希 戸田　梨鈴	インターナショナルカフェ
2024 年 6 月 24 日	16:00－ 18:00	第67回　人間科学セミナー Teacher Education and Culturally Responsive Pedagogy	TONY BURNER (University of Southeastern Norway) 川口　広美（広島大学）	オンライン
2024 年 7 月 11 日	13:30－ 15:00	第69回　人間科学セミナー 新任の先生の研究紹介	佐伯いく代 直原　康光 中川　　威	ラーニングコモンズ
2024 年 7 月 25 日	13:30－ 15:00	第71回　人間科学セミナー 新任の先生の研究紹介	坂口　真康 知念　　渉 三谷はるよ	ラーニングコモンズ
2024 年 9 月3－4日	3日： 12:30－ 17:30 4日： 10:30－ 16:15	第72回　人間科学セミナー Praat で音声解析！ 集中セミナー	岩本　教慈（早稲田大学）	第 31 講義室 ＋ オンライン
2024 年 10 月 15 日	15:00－ 17:00	第74回　人間科学セミナー 社会的重要性の認識がもたらす排外主義	Alex Kustov (University of North Carolina at Charlotte)	ラーニングコモンズ
2025 年 2 月 1 日	15:00－ 17:00	第79回　人間科学セミナー 【最終講義】 振り返りつつ、前を向く ―もう一つのフィールドワークに向けて	河森　正人	第 51 講義室
2025 年 2 月 14 日	13:30－ 18:00	第 80 回　人間科学セミナー 【最終講義】 アフリカ教育開発研究の 25 年　―ケニアのフィールドで学んだこと―	澤村　信英	第 207 講義室
2025 年 3 月 7 日	14:00－ 15:30	第82回　人間科学セミナー 【最終講義】 社会調査と宗教研究と「緒方洪庵」	川端　　亮	第 51 講義室 ＋ オンライン
2025 年 3 月 7 日	15:40－ 17:10	第83回　人間科学セミナー 【最終講義】 35 年間を振り返って ―思想史、科学論、社会学―	山中　浩司	第 51 講義室 ＋ オンライン
2025 年 3 月 21 日	15:00－ 17:00	第84回　人間科学セミナー 【最終講義】 福島第一原発事故とリスク社会論	小林　清治	第 207 講義室 ＋ オンライン

第 65, 66, 68, 70, 73, 75, 76, 77, 78, 81 回　人間科学セミナー

行動学系若手セミナーシリーズ

講演者　設樂 哲弥／大江 龍太郎／松井 大／石川 萌子／胡 毓瑜／
米田 翼／温 若寒／伊藤 篤希／戸田 梨鈴（大阪大学人間科学研究科）

主　催　行動学系若手セミナーシリーズ実行委員会

共　催　行動学系・未来共創センター・IMPACT

＜要旨＞

2024 年度より新たに立ち上げた「行動学系若手セミナーシリーズ」。今年度は 10 回にわたってセミナーを実施し、さらに 10 月からは「新任教員研修プログラム」（研究能力開発プログラム）としても実施してきました。各回において、行動学系の若手教員や大学院生を中心に登壇していただき、幅広いテーマでトークしていただきました。質疑や議論も毎回活発で，セミナー終了後も登壇者と参加者との間で延長戦が繰り広げられることもしばしばありました。参加者数はのべ 150 名を超え、研究科内での若手研究者同士の交流の場としても一定の役割を果たすことができたのではないかと考えています。

＜トークテーマ＞

#01　サルから学ぶヒトのよくできた身体構造：
　　ヒトはなぜ二足で歩けるのか？

#02　持続的注意と BGM の関係：
　　音楽で退屈な課題を乗り切る

#03　学習と行動の比較心理学への招待：
　　身体に根差した生命的な心の見方を目指して

#04　グリットの萌芽に迫る：
　　粘り強い子どもってどんな子？

#05　脈波データからみた心理状態の特徴及びうつの原因分析

#06　「地球発／金星行」未知との遭遇ツアー：
　　ベルクソンの MTS 進化論と地球外生命研究の最前線

#07　オンライン脱抑制の影響メカニズムを検証する：
　　ネット掲示板実験を用いて

#08　こころの文化差と集団：
　　適応環境としての「集団」理解を目指して

#09　手を動かして学ぶ強化学習モデル：
　　Stan を用いたパラメータ推定

#10　Punish or Forgive?：
　　子どもは「わるいこと」にどう立ち向かうのか

会場の様子

#01：設樂 哲弥 氏（生物人類学・助教）

#02：大江 龍太郎 氏（応用認知心理学・博士後期課程）

2024年4月25日～2025年2月20日（毎月1回：計10回）

＃03：松井 大 氏（行動生理学・助教）

＃04：石川 萌子 氏（比較発達心理学・博士後期課程）

＃05：胡 毓瑜 氏（環境行動学・助教）

＃06：米田 翼 氏（評価資料室・助教）

＃07：温 若寒 氏（社会心理学・博士後期課程）

＃08：伊藤 篤希 氏（安全行動学・助教）

＃09：松井 大 氏（行動生理学・助教）

＃10：戸田 梨鈴 氏（比較発達心理学・博士後期課程）

第 67 回　人間科学セミナー　　2024 年 6 月 24 日

Teacher Education and Culturally Responsive Pedagogy: Preparing teachers for diverse classrooms in Norway and Japan

講演者　**トニー・バーナー 氏**／サウスイースタン大学
川口 広美 氏／広島大学

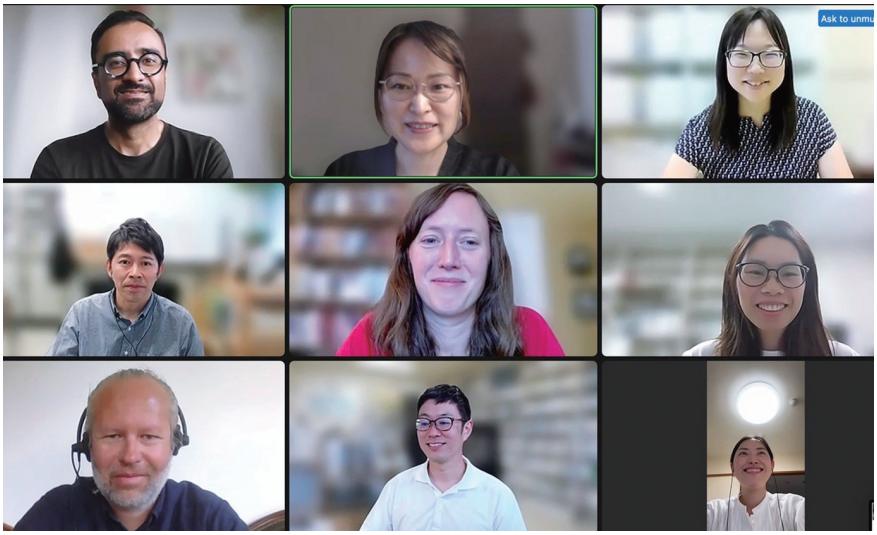
討論者・コーディネーター
佐藤 仁 氏／福岡大学　**北山 夕華**／大阪大学

＜要旨＞

2024年6月24日（月）にオンラインセミナー Teacher Education and Culturally Responsive Teaching を開催しました。これは、北山夕華・橋崎頼子編著『多文化社会の学校と教師教育－日本とノルウェーの国際比較研究から－』（大阪大学出版会）の出版を受け、多文化社会に対応した学校と教師教育のあり方について考えるために企画されたものです。このセミナーでは、日本より少し早く多文化化を経験し、法制度の整備が進められてきたノルウェーからゲストを招き、多文化社会に対応した教師教育について議論を深めました。

まず、トニー・バーナー氏（サウスイースタン大学）と川口広美氏（広島大学）から、それぞれノルウェーと日本における多文化社会に対応した教師教育について現況と主な課題、現場の取り組み等について話題提供がありました。続いて、佐藤仁氏（福岡大学）から、教師教育の国際比較研究の視点から、コメントと質問がありました。また、バーナー氏の共著者であるオーモース氏とシェルブレッド氏も参加し、それぞれの専門分野であるサーミ人の教育や、ノルウェーの教育史における国民形成について補足コメントをいただきました。その後、一般参加者との質疑応答をおこないました。

セミナーは英語のみ（通訳なし）にもかかわらず、約 70 名の参加がありました。多くは日本からの参加者でしたが、ノルウェーやアイスランドからの参加もあり、オンラインセミナーならではの裾野の広さも感じられる機会となりました。日本においても、学校現場の多文化化の進展が顕在化しており、今後も多文化社会に対応した教育のあり方について国境を越えて議論していきたいと考えています。



セミナーの様子

第 69 回　人間科学セミナー　新任の先生の研究紹介　2024 年 7 月 11 日

レガシー・ツリー

講演者　佐伯 いく代 ／共生学系

＜要旨＞

樹木の中には人の寿命をゆうに超えて生きるものがあり、大樹に育った木々は、そこで起こった出来事や、人と森との関わりの歴史を知る遺産として捉えることができる。私は 2021 年から 2022 年にかけ、屋久島において樹齢 1000 年を超えるヤクスギの樹の上に登り、そこに生息する動植物について調べるという貴重な機会をいただいた。荘厳な巨木林としてのイメージの強いヤクスギ林であるが、過去には激しく伐採され、大量の木材が島外に搬出された。しかし当時、樹形が悪いなどの理由で価値がないとみなされ、森の中に残されたヤクスギの樹上には、豊かな生物多様性が育まれていた。これらのヤクスギは、人と自然との共生のシンボルとなり、屋久島が世界自然遺産として登録される理由の一つとなっている。本発表では、人為攪乱や紛争などを生き抜いた樹木の価値を再考し、未来に引き継ぐ意義について議論したい。

親の別居・離婚の子どもへの影響に関する研究状況について

講演者　直原 康光 ／教育学系

＜要旨＞

日本では年間約 18 万人の子どもが親の離婚を経験します。欧米を中心とした研究によれば、親の別居や離婚は、子どもの様々な適応の側面にネガティブな影響を与えるとされていますが、親の別居や離婚を経験し一時的に不適応に陥ってもそこから回復していくことができる子どもとそうでない子どもがいるとされています。そのため、親の別居や離婚を経験した子どもを一括りにするのではなく、子どもの適応に違いをもたらす要因を明らかにすることが重要と考えられます。日本において離婚家族を対象とした研究は少ないと指摘されてきましたが、社会的な関心の高まりとともに、近年では研究が増加しつつあります。本報告では、国内外の研究を概観し、現在までに分かっていることをまとめつつ、研究結果を支援にどのように活かすことができるのかについても考えていきたいと思います。

老い、病み、死ぬとしても、人は幸福に生きられるか －縦断研究からの知見－

講演者　中川　威 ／行動学系

＜要旨＞

人がどのように発達し、加齢するかは、その人が生まれた社会と時代によって異なります。現代の多くの国で、人はかつてないほど長生きできるようになっています。ですが、その人が生まれた社会と時代によらず、人生において対処すべき課題があります。主な課題として、老いること、病気になること、死ぬことという人生で避けることができない困難が挙げられます。この発表では、同一人物を追跡する縦断研究からの知見に基づいて、人生の困難に直面したとしても、高齢期において人は幸福に生きられるかを報告します。未来の社会と時代でどのような知見が必要になるか、どのような研究をこれから行っていきたいか、行っていくべきか、セミナーに参加される方々とともに考えるきっかけにできれば嬉しいです。

第 71 回　人間科学セミナー　新任の先生の研究紹介　2024 年 7 月 25 日

グローバル化時代の「共生社会」と教育について考える
－南アフリカ共和国からの学び－

講演者　**坂口　真康** ／共生学系

＜要旨＞

本講演では、講演者の現在までの研究内容を紹介させていただきながら、参加者の皆様と一緒にグローバル化時代の「共生社会」と教育（特に学校教育）について考えたいと思います。講演の中では、南アフリカ共和国の事例に焦点をあて、同国における具体的な取り組みから学び得る点を提示いたします。

グローバル化の進行等により一社会内の人々の文化的背景が一層多様化／複雑化する中で、他者との「共生」に関する研究や実践が様々な方面で展開されてきました。そのような中、特に次世代を担う人々を対象とする学校教育における議論や試みが盛んに行われてきました。本講演では、学校教育を通じてグローバル化時代の「共生社会」を思考し、試行する際に見極める必要があると考えられる諸観点を整理したいと思います。その際、制度としてのアパルトヘイト（人種隔離政策）が撤廃された後の南アフリカ共和国に着目し、同国の具体的事例をもとにして議論を進めます。

都市で育つ／育てる
ー「大企業型」「地元型」「残余型」という分類を手がかりにー

講演者　**知念　　渉** ／教育学系

＜要旨＞

社会的な不平等はどのように再生産されるのか。この問題について報告者は、いくつかの社会調査を通じてアプローチしてきました。本報告では、共同研究として行った母親と高校生への質問紙調査とインタビューから得られたデータを用いて、育つ／育てるという経験を社会階級という観点から分析します。これまでの研究では、親の学歴や社会経済的背景（Social Economic Status）という尺度で教育格差を捉えてきました。それに対して本報告では、P. ブルデューの階級分析と小熊英二の『日本社会のしくみ』を参考にして、多重対応分析によって親子を「大企業型」、「地元型」、「残余型」に分類します。その分類を用いることで、日本の社会的再生産のあり方に新しい論点を持ち込むとともに、質問紙調査とインタビュー調査の組み合わせ方などについても提案してみたいと思います。

子ども期の逆境体験（ACE）の長期的影響と保護要因

講演者　**三谷　はるよ** ／社会学系

＜要旨＞

子ども期の逆境体験（Adverse Childhood Experience: ACE）とは、18 歳になるまでに主に家庭内で経験された虐待・ネグレクトの被害、および養育機能の不全状態（家族の依存症、精神疾患、DV への曝露等）を指す用語です。アメリカで 1990 年代に始まった ACE 研究は、いまや国際的・学際的な広がりを見せています。発表者のこれまでの調査研究によれば、日本でもこれらの逆境体験が累積すると、その影響は成人期に至るまで及び、心身の疾病リスクを増大させるだけでなく、失業や貧困、社会的孤立や子育ての困難などの問題を抱える可能性が高まることがわかっています。しかし、ACE の悪影響を緩和し、子どもたちが健やかに人生をあゆむことを促す保護要因も存在します。今回の発表では、ACE の長期的影響の実態と、その傾向を緩和しうる保護要因、具体的な取り組み事例について議論したいと思います。

第 72 回　人間科学セミナー　　2024 年 9 月 3，4 日

Praat で音声解析！集中セミナー

講演者　**岩本 教慈先生**／早稲田大学
主　催　**発達と教育のためのプレイフル・ラボ**
共　催　**大阪大学 大学院人間科学研究科 比較発達心理学研究分野・未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクト**

＜要旨＞

2024 年 9 月 3 日～ 4 日に、早稲田大学の岩本教慈先生をお迎えして、Praat を用いた音声解析の集中セミナーを 実施しました。当日は、対面・オンラインを含め約 40 名の方々が参加してくださり、質問も活発に飛び交う 非常に有意義なセミナーになりました。

セミナーでは、音声解析の基礎知識をはじめ、アノテーションの付与の仕方や、音声解析の特徴量の取得方法、さらに Script を用いた解析の自動化などについて、網羅的かつ実践的なお話をしていただきました。Praat を聞いたことはあるし、音声解析にも興味はあるけれども、どのように勉強を進めたら良いかわからない、という方にはまさに打ってつけの内容だったと思います。これを機に、多くの研究者や臨床家のみなさんが、音声解析に挑戦してみようという気持ちになったなら、主催者として望外の喜びです。

講演の様子

講師の岩本先生、ご参加くださったみなさま、本当にありがとうございました。

第 79 回　人間科学セミナー　　2025 年 2 月 1 日

【最終講義】
振り返りつつ、前を向く ―もう一つのフィールドワークに向けて

講演者　**河森 正人 教授**／グローバル共生学講座

＜最終講義＞

主著である『タイの医療福祉制度改革』をはじめとする研究業績について振り返った後、退職を前にした心境が語られた。「振り返りつつ、前を向く」と題された最終講義の要旨は以下のとおりである。「無常の上に、さあ咲き誇れ」（常田大希 “Nekko”）。自分の目に今見えている（あるいは、つい最近までそのように見たかった、これからもそのように見たい）世界がこれである。「人生の午後 3 時」（ユング）に差し掛かった段階で見えている世界。最終講義では、こうした世界をより鮮明にしていくための、自分自身に課した「もう一つのフィールドワーク」について展望する。

＜略歴＞

同志社大学文学部卒、大阪市立大学大学院創造都市研究科博士後期課程修了。ジェトロ・アジア経済研究所研究員、タマサート大学タイ研究所客員研究員、チュラロンコン大学経済学部客員研究員、在タイ日本国大使館専門調査員、ジェトロ・アジア経済研究所バンコク事務所長、大阪外国語大学外国語学部助教授、同教授、大阪大学大学院人間科学研究科教授を歴任。

第 80 回　人間科学セミナー　　2025 年 2 月 14 日

【最終講義】
アフリカ教育開発研究の25年 ―ケニアのフィールドで学んだこと―

講演者　**澤村 信英 教授**／グローバル共生学講座

＜最終講義＞

澤村先生は、サブサハラ・アフリカの教育と開発をめぐる諸課題を研究テーマとし、フィールドワークにもとづく質的研究を先導的に行ってきました。最終講義では、2000 年前後からの約 25 年間のフィールドワークの軌跡を、120 枚以上の写真を投影しながら振り返りました。ケニアのマサイの人々の暮らすナロック、ケニア海岸部のラム島や、北部の難民キャンプ、ナイロビのスラム、さらにはマダガスカルや中国において学校や地域の人々を対象に調査を行ってきた様子が、写真から滲み出ていました。また、それらの写真には、フィールドワークを共にした多くの共同研究者や学生も写っていて、澤村先生の人脈の広さが感じられました。

澤村先生の講義に加え、澤村先生のかつての同僚や共同研究者、卒業生など 8 名ほどから澤村先生とのエピソードと感謝の言葉が述べられました。第 2 部ではサワ会と称して、茶菓子と軽食での立食パーティーで澤村先生らしい飾らない温かい会となりました。

＜略歴＞

1982 年に愛媛大学理学部を卒業後、同大学大学院理学研究科に進学し、1986 年に修士課程を修了。この間、2 年間、青年海外協力隊（現 JICA 海外協力隊）理数科教師隊員としてマラウイの中等学校で活動している。国際協力事業団（現国際協力機構）に勤務、その間、海外長期留学制度により 2 年間、英国エディンバラ大学大学院社会科学研究科（教育）に留学した。1997 年に広島大学に新設された教育開発国際協力研究センターに助教授として着任、2008 年教授に昇任。また、2006 年大阪大学大学院博士号（人間科学）取得。2009 年大阪大学大学院人間科学研究科に教授として着任。

第 82 回　人間科学セミナー　2025 年 3 月 7 日

【最終講義】社会調査と宗教研究と「緒方洪庵」

講演者 川端　亮 教授／社会環境学講座

＜最終講義＞

川端亮先生は、社会調査やデータ解析、宗教研究で多大な功績を残されてきたことに加えて、社会貢献面でも酒造の復興等に大きく寄与されてきました。社会調査・データ解析に関しては、SRDQ という日本最大級のデータアーカイブの整備に尽力され、多くの研究者にデータ二次分析の門戸を開かれました。またテキストデータの計量的分析方法の開発を進め、現在のスタンダードを確立されました。宗教研究では、宗教意識の計量的分析や真如苑への参与観察、創価学会の国際的な普及等のテーマにおいて多くの論文・書籍を出版されました。後年には、日本酒『緒方洪庵』の製造や営業を通して地域貢献の研究および実践を精力的に進められました。本講義には、100 人以上の関係者が参加され、これらの長年にわたる業績を振り返って説明していただきました。

＜略歴＞

1984 年京都大学文学部社会学専攻を卒業後、大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程に進学。1989 年に同博士後期課程を単位取得退学、大阪大学人間科学部助手に着任。1991 年より光華女子大学文学部専任講師、1996 年に同助教授。1998 年に大阪大学人間科学部助教授に着任され、2003 年に大阪大学より博士（人間科学）を授与される。2004 年より大阪大学人間科学研究科教授。2018 年 4 月からは研究科長を 2 年間務められた。

第 83 回　人間科学セミナー　2025 年 3 月 7 日

【最終講義】35年間を振り返って ―思想史、科学論、社会学―

講演者 山中 浩司 教授／社会環境学講座

＜最終講義＞

山中浩司先生は、科学思想史、医療社会史、医療社会学を専門とされ、技術社会史的・文化史的なアプローチを中心に、理論や資料に裏打ちされた丹念なご研究を展開されてきました。キャリア初期の精神医学や医療器具の社会史に関するご研究では、ドイツ語の難解な資料の分析など、独自かつ国際的にも貴重な成果を提出されました。医療社会学的な研究では、希少難病の患者会とのラポールや共同調査のなかで当事者や現場の声に耳を傾け、病に関する学術的・社会的議論を深められてきました。近年は男性学にもテーマを広げられ、大阪府の男女共同参画審議会委員として社学連携活動にも貢献されてきました。また、他分野の研究者と共同で終末期に関するフォーラムを定期開催されるなど、領域横断的な議論の創出やその発信にも尽力されています。本講義では、100 人以上の参加者に向けて、ユーモアも交えながら和やかな雰囲気で講義いただきました。

＜略歴＞

1982 年京都大学経済学部を卒業後、1984 年京都大学大学院経済学研究科修士課程修了、約 1 年間のフライブルク大学歴史学科への留学をはさんで、1990 年大阪大学教養部講師に着任。1994 年に人間科学部講師への配置転換を経て、1996 年 4 月より助教授、2009 年 3 月に大阪大学より博士（人間科学）を授与され、2010 年 4 月より教授。

第 84 回　人間科学セミナー　　2025 年 3 月 21 日

【最終講義】
福島第一原発事故とリスク社会論

講演者　**小林 清治 准教授**／人間行動学講座

＜最終講義＞

小林清治先生は、環境リスクをともなう廃棄物処理施設などの立地をめぐる地域コンフリクトを研究対象として、理論と現場を往還させながら現実を直視し、教育研究を積み重ねられてこられました。科学技術の発展は、豊かさとともに人間や環境に対するさまざまなリスクをもたらしますが、経済成長を優先する社会では、後者の側面はあまり重視されず、社会の周辺部にしわ寄せされる傾向がみられます。小林先生は、リスクを可能なかぎり低減した上で、残されたリスクを共有する社会の仕組みについて考察を深めてこられました。他方で、小林先生は、戦後民主主義の体現とその混乱の中で、必ずしも戦争体験をしていない世代であっても戦後思想の課題を積極的に受け継ごうとする試みがなされたこと、そこから何を学ぶべきかについて仲間の研究者たちと議論を重ねてこられたため、そうした経験が、1993 年度の学部改革により設立された旧大阪外国語大学国際文化学科開発・環境専攻を先導していくことに繋がったことも伺いました。近年は、東日本大震災を踏まえつつ、原子力発電関連の施設コンフリクトに関する研究を進めており、最終講義では、ウルリッヒ・ベックのリスク社会論の視座を踏まえた議論を紐解いてくださりました。ハイブリッド形式での開催により、卒業生を中心に国内外の様々な地域からも含め、およそ 60 名のご参加を頂きました。

＜略歴＞

立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程単位修得退学。1994 年大阪外国語大学国際文化学科開発・環境専攻講師、2000 年同大准教授を経て、2007 年大阪大学人間科学研究科准教授として着任。専門は、環境社会学、現代科学技術と J. ハーバーマスの批判理論、リスク社会論。

◆1. 2　学生企画によるプロジェクト

学生主導のイベントです。「学生プロジェクト」を通じて新しいつながりを生み出しました。

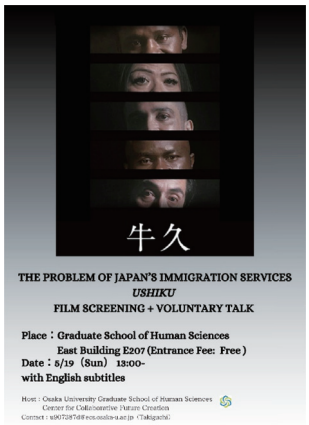
日付	タイトル	企画者・話題提供者
2024 年 5 月 19 日	日本の入管問題の現在：映画『牛久』上映会	中谷 碩岐、瀧口 隆、 Héctor Uclés
2024 年 11 月 28 日	『する』『される』を超えてみる～誰もがケアされる教育のために～	藤阪 希海、河南 真衣
2025 年 2 月 4 日	四学系横断卒業研究発表会	河原 聡希、葛西 李成

日本の入管問題の現在：映画『牛久』上映会

実施日時：2024 年 5 月 19 日（日）13:00－16:30
実施場所：大阪大学吹田キャンパス　人間科学研究科東館 E207
参加者数：日本人学生、留学生など 21 人
企 画 者：中谷 碩岐、瀧口 隆、Héctor Uclés

○実施内容

2024 年 5 月 19 日（日）、大阪大学吹田キャンパス人間科学部棟東館 E207 にてワークショップ「日本の入管問題の現在」を開催した（運営：中谷碩岐、瀧口隆、Héctor Uclés）。本イベントは、日本の入管問題を扱ったトーマス・アッシュ監督の映画『牛久』（2021）の上映会を実施することで、日本の入管問題の現状を知る機会をもつことを目的とするものであった。また上映会後、参加者同士でこの問題について議論を交わすことで、この問題に関する相互の見解を共有した。



ポスター（英語版）

日本の入国管理センターにおける難民申請者への不適切な対応は、とりわけ 2021 年 3 月に起こったスリランカ人女性ウィシュマ・サンダマリさんの死亡事件以来、大きな注目を集めている。『牛久』は在留資格のない外国人、難民申請が認められず国外退去を命じられた難民申請者を“不法滞在者”として強制的に収容している施設の一つである「東日本入国管理センター」（茨城県牛久市）を舞台として、入管に収容された当事者たちの証言を撮影した映画である。彼・彼女らの現状や肉声を施設の外に届ける機会がほとんどないなか、厳しい規制を潜り抜けて隠しカメラで撮影された本作の上映会は、参加者と運営の双方にとって貴重な機会であったように思われる。

（詳しくは、HP（https://www.ushikufilm.com/introduction/）を参照）

○プロジェクトの考察

今回のイベントの開催にあたっては、題材が国際的な問題であることを考慮して英語版のポスターを作成した上で、Héctor Uclés 氏の協力を得て留学生に向けた広報も積極的に行い、当日は留学生にも多く参加して頂くことができた。その成果もあって、週末かつ対面限定での開催であったにもかかわら

ず、当日は雨の中 20 名以上の来場者を迎えることができた。

上映会は滞りなく終了し、後半のディスカッションでも、英語と日本語の双方を交えて活発に議論が行われた。自分のコメントを日本語/英語で述べた後、それを英語/日本語に即興で翻訳するという難易度の高い形式を取らざるを得なかったにもかかわらず、日本人学生と留学生の双方が積極的に発言し、質問者が言葉に詰まる場面においても他の参加者がパラフレーズ、代理翻訳を行うなど、議論が白熱しつつも終始和やかな雰囲気で進行し、日本の法制度や警察権力の問題点、移民を受けいれているヨーロッパや北米の現状との比較、移民による日本と外国の文化の違い等の多岐にわたる論点について、生産的な議論を行うことができたように思われる。

上映会の様子

主催としては、開催前は参加者が集まるか不安であったものの、潜在的には関心のある方が多く存在することを知り、励まされる思いだった。今後も社会課題に関する学生プロジェクトを継続して開催していきたいと考えているが、その際にも広報の仕方等を工夫することによって情報を広く届けていくことを心掛けたい。

（文責：中谷 碩岐）

『する』『される』を超えてみる～誰もがケアされる教育のために～

実施日時：2024 年 11 月 28 日（木）13:30−16:45
実施場所：大阪大学 CO デザインセンター
参加者数：合計 10 人
運営 2 人、講師 1 人
参加者 7 人（学生、教育関係者、子育て支援者、社会福祉士など）
企 画 者：藤阪 希海、河南 真衣

○実施内容

本プロジェクトでは、対人支援職ケアの実践家である櫻田千江里氏を講師に招き、誰もがケアされる教育について考えた。「教える」という役目には葛藤がつきものであり、バーンアウトの原因になりうると考えられている中で、バーンアウトを防ぐ共同体の形成に寄与することを目的とした。

【イベント案内文】

先生も、先輩も、親も、教育者である以前に人間。教育「する」ひとが疲れる教育は、教育「する」人も、教育「される」ひとも蝕んでいきます。誰もがケアされる教育やコミュニティを目指して、教育をめぐる葛藤を共有し、相互ケアに取り組むワークショップを実施します。

【当日の流れ】

前半では、講師による講演で、小学校での勤務経験やデンマークへの教育視察等から感じられた葛藤が共有された。それを受けて、質問タイムに入った。そこでは、思い通りにならないときの教育者の心の動き、教育者同士の関係性等について議論が交わされた。

後半では、心理学者のローゼンバーグが開発した非暴力コミュニケーション（Nonviolence Communication=NVC）の手法を活かしたワークショップを実施した。３人１組になり、「『する』『さ

れる』を超える」というキーワードから連想した経験を語り合い、自分に必要なケアを発見する時間となった。

最後に、「『する』『される』を超える」キーワードやイメージを各々表現したうえで、イベント全体を振り返るグループインタビューの時間を 30 分ほど設けた。

○プロジェクトの考察

【成果・学び】

普段なかなか共有しにくい経験や葛藤を振り返ることのできる場として、会場は大いに盛り上がりを見せ、講師・参加者・運営すべての人にとって学びのあるプロジェクトとなった。教育者にもケアが必要であるという認識を共有しながら、多様な背景を持った人々の意見が交わることで、誰もがケアされる教育についての議論も深まった。イベント終了後には参加者同士が連絡先を交換する場面もあり、互いにケアし合う共同体の形成に寄与するという目的は、達成されたと言える。

講師の櫻田氏からは、講演内容について学びがあったというコメントをもらった。講演内容は当初、櫻田氏の思いを論理立てて説明する予定であったが、運営メンバーと櫻田氏の話し合いの結果、櫻田氏の経験を中心とするものへと変更された。イベント実施後に、複数の参加者から「このままの講演・ワークショップの内容で、自分の職場でもやってほしい」という声をもらい、経験を語ることで対話や気づきが促進されることがわかったという。

運営メンバーも、ワークショップを通して自己理解が深まった。またこれだけ葛藤を抱えている人がいることを改めて知り、勇気づけられる思いだった。

ワークショップの様子

【開催場所】

大学で実施したことで、教育関係の仕事に従事した経験のある人だけでなく、教育に関心のある学生複数人にも参加してもらえたと思われる。また、大学におけるイベント情報に意識を向けている人が中心に参加したことは、対話の内容にも影響したと考えられる。

大学の中でも、会場を CO デザインスタジオとしたことで、リラックスした雰囲気を作り出すことができた。靴を脱ぎ、低い椅子や座布団に座ることで、会場の威圧感が抑えられているようであった。ただ、豊中キャンパスが広いことと、CO デザインセンターの場所がわかりにくいことから、迷ったという参加者もいた。

【次回に向けて】

当初参加を希望していたものの、急遽参加できなくなってしまった人科生が何人かいたので、次はぜひ人科で実施したい。絨毯の部屋にレジャーシートを敷くなどして、CO デザインセンターとは違う環境でも安心感のある会場づくりをしたい。同時に、安全性を高めるためのルールや声掛けについても、さらに考えたい。

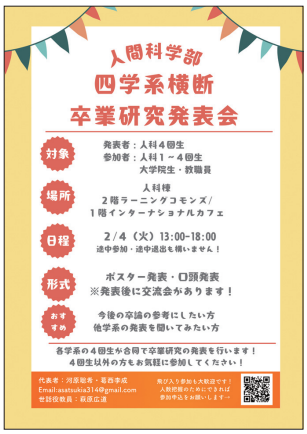
また、今回は平日昼間に行ったため、現役教員などの参加が少なかった。次回は土日に開催するなど、実施曜日・時間も工夫を行いたい。

（文責：藤阪 希海）

四学系横断卒業研究発表会

実施日時：2025 年 2 月 4 日（火）13:00－18:00
参加者数：40 人（発表者 15 人、聴講者 25 人）
　　発表者内訳：行動学系 5 名・教育学系 6 名・社会学系 4 名・
　　共生学系 1 名（都合により辞退）
企 画 者：河原 聡希、葛西 李成

○実施内容



【概要】

2025 年 2 月 4 日（火）、大阪大学人間科学部インターナショナルカフェにて、四学系横断卒業研究発表会を開催した。（運営：河原 聡希、葛西 李成、世話役教員：萩原 広道）

発表者は卒業論文を提出した人間科学部 4 回生、参加対象者は人間科学部学生・教職員・発表者の知人とし、ポスター発表・口頭発表・交流会を実施した。4 回生 15 名が卒業研究を発表し、行動学系・教育学系・社会学系・共生学系の枠を超えた議論が行われた。

【本企画の目的】

本企画は、人間科学部の学系間の研究交流の促進を目的として開催された。参加者発表者双方にとって、研究アイデアの創発や研究コラボレーションの促進を、また意図的に専門外の他者に研究を語る場を設けることで、発表者が自身の研究を相対化し、研究成果を社会に還元する足がかりとすることを目指した。

口頭発表の様子

【当日の流れ】

発表会の 1 か月前、多くの 4 回生はポスター発表の経験が少ないことが明らかとなった。そのため、ポスターテンプレートや発表・質問のやり方などの資料を共有し、発表の敷居を下げられるようサポートした。

発表会当日は、まず本企画の開催に至った経緯と、聴講のポイント、質問のコツを説明した。その後、4 名による口頭発表を実施した。口頭発表は、一人あたり発表時間 15 分、質疑応答 10 分とした。参加者には、1200 字程度の卒業研究要約集を配布し、事前予約・事後アンケートに回答した方には、期間限定でポスター原本や発表資料・補足資料を Google Drive で共有した。続いてポスター発表に移り、2 つのグループに分かれ 11 名が、50 分間の発表・議論を行った。最後に、本発表会の総括を行い、その後、交流会を実施した。

当日のタイムテーブル

12:50	受付開始
13:00-13:10	はじめの挨拶
13:10-15:00	口頭発表（4 名発表）
15:10-16:00	ポスター発表Ａ（5 名発表）
16:00-16:50	ポスター発表Ｂ（6 名発表）
16:50-17:00	終わりに
17:00-18:00	交流会
18:00	解散

○プロジェクトの考察

本企画は、大阪大学人間科学部が「学際系」をその特質として掲げているにもかかわらず、学年が上がるにつれて、学系間の交流が乏しくなることに対する課題意識を出発点とした。4 回生の発表者にとって、学会発表を見据えた発表経験を積むだけではなく、他学系すなわち他分野の学生との交流を通じ、別の研究アプローチを知ることで、研究アイデアの創発やコラボレーションの種が芽吹き始めたように感じられた。さらに 2-3 回生と、今後、卒業研究を行う学生にとっては、卒業研究への考え方、取り組み方を学ぶ貴重な機会となった。発表中の議論は活発で留まることを知らず、会場の至るところで、「もっと聞きたい」、「もっと答えたい」という声が上がっていた。参加者、発表者の旺盛な好奇心と探求心が相まって、熱気あふれる素晴らしい発表会になった。

最後に、ある先生から、「研究テーマは多岐にわたるが、根底には“人間”を知りたいという共通の思いがある。人間科学部の良さが表れていた発表会だった」とのコメントをいただいた。来年度も後輩有志が継続できるよう、引継ぎ資料の作成やアドバイスを通じてサポートしていきたい。

（文責：河原 聡希）

ポスター発表の様子

四学系 集合写真

2　大阪大学オムニサイト協定 OOS

大阪大学オムニサイト（OOS）は、2017 年 4 月新たな共創の仕組みとして始動しました。産官社学連携により、学内外のセミナーやイベントの「場」、企業・財団・社団・地方自治体・NPO/NGO などの活動の「場」を支援、活用します。OOS が創出する様々な「場」で人々が出会い、共感し、共生の輪が広がることを目指しています。OOS 協定を活用し、これまでに様々なプロジェクトが実施されました。

◆2. 1　大阪大学オムニサイト（OOS）　協定先一覧（2024 年度）

一般社団法人全国自治会活動支援ネット
一般社団法人今井町大和観光局
パナソニックホームズ株式会社
NPO 法人北いわて未来ラボ
NTN 株式会社
一般社団法人タウンスペース WAKWAK
共和メディカル株式会社
西予市野村地域自治振興協議会
NPO 法人おおさかこども多文化センター
大阪トヨタ North 株式会社
一般社団法人パースペクティブ
株式会社日本電商
一般社団法人全国寺社観光協会
岩手県九戸郡野田村
新安世紀教育安全科技研究院
NPO 法人日本災害救援ボランティアネットワーク
ダイハツ工業株式会社
大阪市教育委員会
中銀インテグレーション株式会社
愛媛大学社会共創学部
一般社団法人地域情報共創センター
吹田市社会福祉協議会
タマパック株式会社
あいおいニッセイ同和損害保険株式会社

2024 年度新たな協定　あいおいニッセイ同和損害保険株式会社

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社は、グローバルな保険・金融サービス事業を通じて、安心と安全を提供し、活力ある社会の発展と地球の健やかな未来を支えることを経営理念に掲げ、損害保険業務全般、自動車保険、火災保険、傷害保険、企業向けの損害保険など、幅広い商品を提供されています。そして今回、大阪大学人間科学研究科は、同社とのオムニサイト協定（OOS）を結ぶこととなりました。

（協定締結後の展望）

これまでの人間科学研究科での交通心理学的研究で蓄積されてきた知見を活用し、あいおいニッセイ同和損害保険株式会社が扱うテレマティクス自動車保険の技術やデータを活用して、交通心理学的、交通工学的研究と地域連携活動（交通安全イベントの共催や交通安全マップを用いた安全教育等）を行い、将来的には、本研究科のみならず工学研究科とも連携しながら、テレマタグで収集するデータを用いた共同研究を目指すとのことです。

（期待される効果）

この協定により、大学および人間科学研究科では、研究の推進だけでなく、交通安全イベントの実施や大学周辺の危険箇所情報の公表を通じて、学生・教職員の交通安全意識を高め、交通事故の削減を期待しています。

また、あいおいニッセイ同和損害保険株式会社では、研究成果を活用した展開により、事故のない快適なモビリティ社会の実現を追求し、損害率の改善も期待されています。

◆2．2　OOS 関連イベント

日付	タイトル	主催等	開催場所
2024 年 4 月 14 日	豊川桜まつり	中島地区コミュニティセンター豊川分館 日本災害救援ボランティアネットワーク（共催）	石川県七尾市
2024 年 5 月 18 日	がいなんよ大学 in のむら 第 16 講　温故挑新 ～乙亥大相撲の歴史を未来へつなぐ～	一般社団法人NEOのむら	西予市野村町 本家緒方蔵
2024 年 7 月 6 日	がいなんよ大学 in のむら 第 17 講　野村土産大作戦	一般社団法人NEOのむら	西予市野村町 本家緒方蔵
2024 年 7 月 24 日	能登のお酒を飲んで応援する会	一般社団法人NEOのむら	人間科学研究科
2024 年 8 月 17 日 ～25日	コミュニティラーニング	野田村	岩手県野田村
2024 年 9 月 22 日	がいなんよ大学 in のむら 第 18 講　クラウドファンディングの舞台裏 ～夢を支えるリアルな戦略～	一般社団法人NEOのむら	西予市野村町 本家緒方蔵
2024 年 9 月 24 日	水害救援活動	日本災害救援ボランティアネットワーク	石川県輪島市
2024 年 10 月 2 日 ～ 2024 年 11 月 30 日	毎年何百人もの大学生が訪れる野村を目指して 学生のまちづくりへの参加を持続可能にする野村モデル	一般社団法人NEOのむら	クラウド ファンディング
2024 年 10 月 3 日	OOS 協定調印式	あいおいニッセイ同和損害保険株式会社	人間科学研究科
2024 年 10 月 26 日 ・27 日	『咲洲こども EXPO 2024』 出展：「スマートフォンをつかって阪大生と 防災ハイキングをしよう！」	一般社団法人地域情報共創センター 大阪大学先導的学際研究機構 住民と育む未来型知的インフラ創造部門	大阪府大阪市 咲洲地区

日付	タイトル	主催等	開催場所
2024 年 11 月 5 日 ～7 日	日中防災研修	新安世紀教育安全科技研究院	石川県 七尾市・輪島市
2024 年 11 月 10 日	『第 4 回 GV フェス』 出展：「防災まち歩き×防災訓練 VR 体験」	一般社団法人地域情報共創センター 大阪大学医学部附属病院高度救命救急センター プライム ライフ テクノロジーズ株式会社	グローバルビレッジ津雲台
2024 年 11 月 16 日	がいなんよ大学 in のむら 第 19 講 「教育」で地域をつくる ～教育研究者 鈴木大裕さんの実践をもとに～	一般社団法人NEOのむら	西予市野村町 本家緒方蔵
2024 年 11 月 17 日	ふくしまてんこもり EXPO 2024 大阪トヨタ災救マップ防災まちあるき	大阪市福島区、 大阪トヨタ	福島区
2024 年 12 月 19 日 （開会式） 2月 （データ収集） 2025 年 3 月 21 日 （表彰式）	エコドライブ・安全運転コンテスト	あいおいニッセイ同和損害保険株式会社	人間科学研究科
2025 年 1 月 19 日	阪神・淡路大震災30年被災地交流会	日本災害救援ボランティアネットワーク	西宮市役所東館
2025 年 2 月 27 日	野田学講義	野田村	野田村 保健福祉センター
2025 年 3 月 15 日	がいなんよ大学 in のむら 第 20 講 にっぽんの田舎を元気にする	一般社団法人NEOのむら	西予市野村町 野村地域づくり活動センター

活動報告

2024 年 12 月 19 日（開会式） 2 月（データ収集）
2025 年 3 月 21 日（表彰式）
エコドライブ・安全運転コンテスト
主催：あいおいニッセイ同和損害保険株式会社

OOS 協定を締結しているあいおいニッセイ同和損害保険株式会社のテレマティクス技術を活用し、「エコドライブ・安全運転」を体験できるコンテスト形式のイベントを開催しました。参加者 29 名の方には、2025 年 2 月中、それぞれの自家用車にテレマタグを取り付けていただきました。スマートフォンの専用アプリを通じて、CO2 排出量や安全運転スコアを確認しながら、ゲーム感覚でエコドライブや安全運転に取り組んでいただきました。これにより、ご自身の運転技術や CO2 削減効果を客観的に把握することができました。

また、3 月 21 日にはエコドライブ部門と安全運転部門のそれぞれで、優秀な成績を収めた 3 名を表彰しました。さらに、吹田キャンパス周辺における危険箇所（急ブレーキ・急ハンドル・スマホ操作が多い地点）も可視化できました（図）。

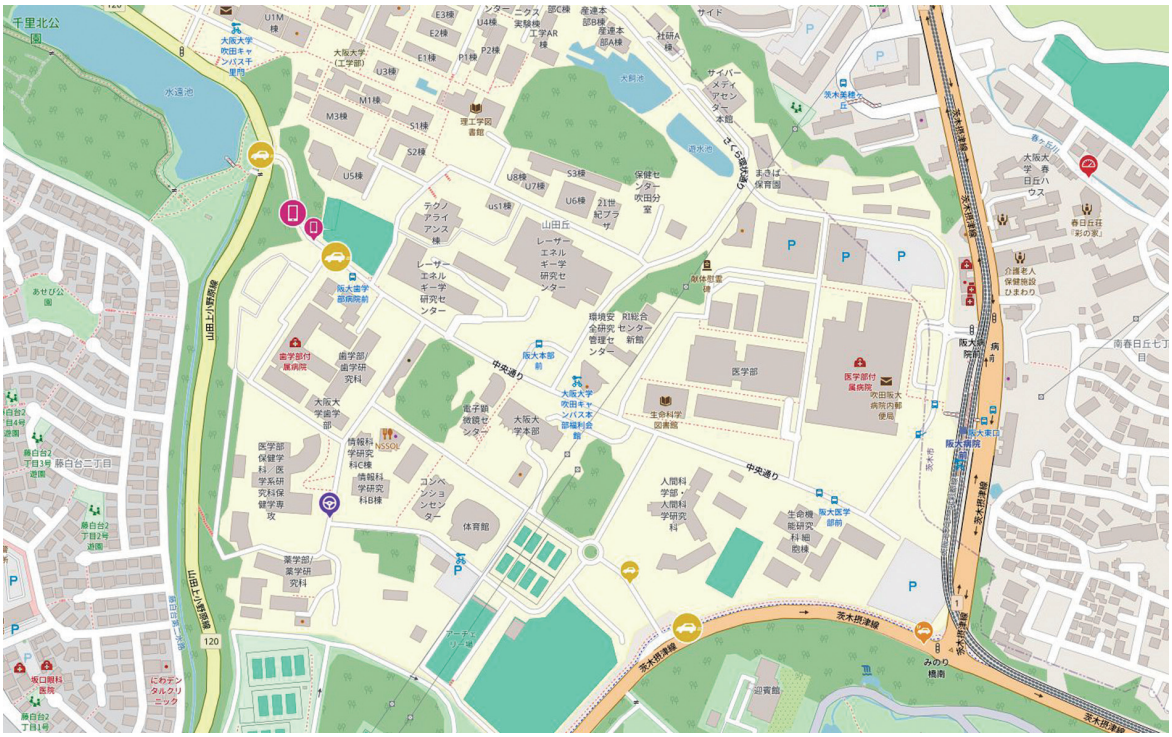


図　吹田キャンパス周辺における危険箇所

◆2. 3　OOS シンポジウム

REPORT
「第 7 回大阪大学大学院オムニサイト協定シンポジウム」

日時：2025 年 2 月 7 日（金）14:30～16:30
場所：大阪大学大学院人間科学研究科 東館 2 階ユメンヌホール
主催：大阪大学大学院人間科学研究科 附属未来共創センター

プログラム

14:00　開会　大阪大学オムニサイト（OOS）の現状のご紹介
　　西森 年寿 人間科学研究科長よりご挨拶
　　新 OOS 協定のご紹介　協定担当：中井 宏 准教授
14:45　講演「やっかいな問題に向きあう：学際共創の取り組みと課題」
　　CO デザインセンター 教授　山崎 吾郎
15:50　ディスカッション
16:30　閉会
17:00　情報交換会 （於 阪大病院スカイレストラン）

人間科学研究科附属未来共創センター「第 7 回大阪大学オムニサイト協定シンポジウム」は、2025 年 2 月 7 日（金）、吹田キャンパス人間科学研究科東館 2 階ユメンヌホールで開催されました。オムニサイト協定 24 団体のうち 15 団体にご参加いただき、参加者は人間科学研究科関係者を含めて 70 名 でした。

当日は、人間科学研究科プロジェクト IMPACT 小牧事務室長が司会進行を務め、冒頭で人間科学研究科長 西森年寿より開会の挨拶がありました。

続いて、新 OOS 協定先であるあいおいニッセイ同和損害保険株式会社について、協定担当の中井宏准教授から紹介があり、IT 技術が人々の運転に与える影響について、心理、行動学の観点から今後共同研究を進めていく予定であるとの報告がありました。また、同社の田中一郎氏からはテレマティクス技術を活用した安全運転の推進事業について説明がありました。

西森研究科長による開会挨拶

中井准教授による新 OOS 協定の紹介

続いて、CO デザインセンター 教授 山崎吾郎より、「やっかいな問題に向きあう: 学際共創の取り組みと課題」と題して講演がありました。単一分野の知見で解決できる「単純な問題」、複数分野の連携が求められる「複雑な問題」に対して、「やっかいな問題」の特徴は、正解がない、終わりがない、などであることが説明され、そのような問題に対してどのような取り組み姿勢が必要であるかが説明されました。また、大阪大学が自治体、企業、NPO 等と共に実施している長期のプロジェクト型科目である「超域イノベーション総合」、社会人と大学院生の協働で実施される「リサーチゼミ」、大学院生が主専攻以外の分野を学ぶ「高度副プログラム」の内容が、「やっかいな問題」に向き合う学際共創的な具体的実践として紹介されました。

山崎教授による講演

その後、参加者は 5 ～ 6 人のグループに分かれて、講演を聞いての感想や、自身の日常の中で遭遇する「やっかいな問題」の例や対処法についてディスカッションを行いました。グループ分けは多様な協定団体からの参加者、大阪大学関係者が混ざり合うように設定され、自己紹介でアイスブレイクを行った後、活発な意見交換が行われました。また、12 グループのうち 6 グループには学生がファシリテーターとして加わり、ディスカッション終了後はファシリテーターの学生 6 名が前に出て、自分のグループのディスカッション内容を全体に共有し、それぞれの発表内容に対して山崎教授がコメントしました。講演とその内容を踏まえたディスカッションを通して、学際共創による社会課題への向き合い方について理解を深めるとともに、参加者相互の交流を図ることができました。

最後に西森研究科長より、参加者への感謝と、引き続きのご協力のお願いが述べられ、閉会しました。

当日は雪の降る天候にもかかわらず、国内外から多くの方々にご参加いただき、誠にありがとうございました。改めて御礼申し上げます。

グループディスカッションの内容の全体共有の様子

3　未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクト

「社学共創活動を展開することにより、共生社会実現に向けての実践的な教育研究活動の強化を図る」という未来共創センターの目的に沿い、2020 年度人間科学研究科教員のボランタリーな意思にもとづいてオープンプロジェクトを開始しました。教員が自発的に組織する社学連携・社学共創活動を支援しています。2023 年度から未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクトとして、大阪大学全体に公募を拡大しました。今年度は社会実装型（５年）４件と、スタートアップ型（３年）22 件の計 26 のプロジェクトが採択されました。

社会実装型プロジェクト（５年まで）			
1	復興まちづくりラボー野田村	2	生野区における多文化まちづくり活動における社学共創プロジェクト
3	グローバルビレッジ・コミュニティ・プロジェクト（GCP）	4	大阪大学人間科学研究科 MeW プロジェクト
スタートアップ型プロジェクト（３年まで）			
1	Ethnography Lab	2	災害ボランティアラボ
3	心理・行動フォーサイトラボ	4	子どもの安全ラボ
5	老いと死の研究ラボ	6	緒方らぼ
7	哲学の実験オープンラボ	8	地域の食とプラネタリーヘルス
9	全国人間科学系部局の連携と活動継続化	10	縮退社会ラボ
11	災間社会ラボ	12	みんなのフィールドエソロジーラボ
13	記憶の継承を祈念する グローバル・ダイアログ（記憶の継承ラボ）	14	プロジェクト SOUP （Share Our Unique Perspectives）
15	Tsunami DRR (Disaster Risk Reduction) Lab.	16	対話で進める ディスアビリティ・インクルージョン
17	多様性の中のウェルビーイング	18	ACE ラボ
19	多文化共生と オープン・ライブラリー・プロジェクト	20	発達と教育のためのプレイフル・ラボ
21	複合的災害と ジェンダーに関する研究における日豪交流	22	ヒトに寄り添うペルソナ創成プロジェクト

◆3. 1　未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクトの活動

社会実装型プロジェクト

◎復興まちづくりラボ－野田村　担当教員：渥美 公秀

2011 年東日本大震災の被災地となった岩手県野田村において、大阪大学教職員・学生と野田村住民・野田村関係者が多様な共創活動を展開することによって、野田村の復興まちづくりが進むことを目的とする。長期にわたるプロジェクトになるので変遷はあるが、現状では、野田学とコミュニティラーニングを主たる取り組みとして、両者の交流活動や他の OOS 協定先を交えた事業推進などを進めている。

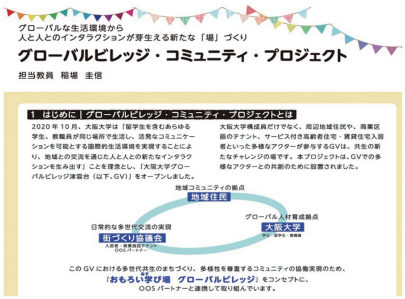
コミュニティラーニング
（2024年8月17－25日：野田村）

◎生野区における多文化まちづくり活動における社学共創プロジェクト　担当教員：ほんまなほ

多国籍・多文化にルーツをもつ住民が人口の 5 分の 1 を占め、かつ、少子高齢化、経済格差が顕著となりつつある大阪市生野区において、多文化共生を中核としたまちづくりの拠点として、御幸森小学校跡地を活用した「いくのコーライブズパーク（いくのパーク）」が発足し、さまざまな社会課題に取り組むために地域協働プラットフォーム「いくのふらっとだいがく」を設立して、大阪大学の教員と学生および住民、近隣教育機関とともに文化プログラムを実施している。

◎グローバルビレッジ・コミュニティ・プロジェクト（GCP）　担当教員：稲場 圭信

▶ウェブサイト：http://patona-suita-tsukumodai.jp/



2020 年 10 月に入居を開始した「大阪大学グローバルビレッジ津雲台（以下、GV 津雲台）」は「留学生を含むあらゆる学生、教職員が同じ場所で生活し、活発なコミュニケーションを可能とする国際的生活環境を実現することにより、地域との交流を通じた人と人との新たなインタラクションを生み出す」ことを理念として掲げている。あらたなコミュニティづくりの社会実験、以下のアクションリサーチを実施している。

- 多様なアクターが新たなインタラクションを生みだす仕組みづくり
- 移動性の高い社会におけるゆるやかなコミュニティづくり
- 他の地域とも連携してアクションリサーチ

2024年度は特に防災の取り組みで、GV と他の地域でのアクションリサーチにつなげた。

2024年11月10日　GV
参加者：津雲台町内会、一般市民約200名

2024年11月17日　鹿児島県鹿屋市川東町
参加者：町内会防災リーダー等約20名

2024年11月17日　鹿屋市高須町
参加者：町内住民80世帯約100名

◎MeW プロジェクト（月経をめぐるウェルビーイングの研究と実践）
担当教員：杉田 映理

▶ウェブサイト：https://mew.hus.osaka-u.ac.jp/

本プロジェクトは、生理用品無償提供用ディスペンサーの実証実験・普及活動を通じて、日本における月経の諸課題について研究するものである。メインコンセプトは、「Menstrual Wellbeing in/by Social Design」であり、月経をめぐるウェルビーイングの向上を目指している。トイレにトイレットペーパーが用意されているのと同じように、排泄と同様に生理現象である月経の対処のために、トイレに生理用品が備えられている状態を実現することを目標としている。 その仕組みづくりの一つとして、生理用品無償提供用のディスペンサーの普及を図る。また、ディスペンサーの普及度（プロジェクトのアウトプット）およびそのインパクト（プロジェクトアウトカム）を捉えることを目指している。

スタートアップ型プロジェクト

◎Ethnography Lab　担当教員：森田 敦郎

▶国際シンポジウムの件数と参加人数：

小規模な国際セミナー 2 件（1 件はセミクローズド）／参加者のべ 35 人

▶社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：

9 件（フォーサイト社主催を含む）／参加者のべ 115 人

大学院共通科目の提供を継続するほか、大阪大学フォーサイト株式会社と連携して一般向けのエスノグラフィー講座（Ethnography Lab School、2 日間、フォーサイト社主催）を 1 回、NTT データ向けの特別研修を 1 回実施した。外部資金として国立情報学研究所より「AI 等を活用したデータエコシステム構築事業」のユースケースを受託し、市民参加によるエスノグラフィの実践とそこでのオープンデータの管理についての研究とプロトタイピングを実施した。このプロジェクトにおいて、京都の民間パブリックスペースである Bridge Studio と連携し、同所にて「都市エコロジー観測所」を開設し、市民参加により都市の環境、インフラストラクチャー、それらが生み出す情動のエコロジーの探究を行なっている。

参考 URL：https://observatoryforurbanecologies.studio.site

We visited Hōnen-in Temple in the Ecology Walk workshop. Photo by @r.o22d.png

◎災害ボランティアラボ　担当教員：渥美 公秀

▶国際シンポジウムの件数と参加人数：1 件／70 人

▶社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：

1）能登半島地震の復興支援：計10回、ボランティア延べ約60人

2）阪神・淡路大震災 30 周年シンポジウム：計 5 回、参加者延べ約 250人

3）被災地交流会：参加者 70 名

1）能登半島地震の復興支援

石川県七尾市を中心に輪島市などの被災地において、NPO 法人日本災害救援ボランティアネットワークや関西学院大学などと連携し、家屋の片づけ作業や仮設住宅での交流活動などに従事した。

2）阪神・淡路大震災 30 周年シンポジウム開催

4 月（テーマ：防災マップ）、6 月（テーマ：障害者と防災）、11 月（子どもと防災）、1 月（テーマ：次世代から見た阪神・淡路大震災）、2 月（まちごと防災のすすめ）の計 5 回、阪神・淡路大震災やこれまでの災害での教訓や日頃の備えを啓発する目的で、NPO 法人日本災害救援ボランティアネットワークと連携して、兵庫県西宮市内の会場でシンポジウムを開催した。

3）阪神・淡路大震災 30 年被災地交流会の開催

渥美研究室が主宰する援原病研究会と共催し、NPO 法人日本災害救援ボランティアネットワークの被災地交流会を開催し、国内外の被災地から迎えた被災者と災害対応について議論した。

七尾市中島仮設団地で出前カフェ

シンポジウム

被災地交流会

◎心理・行動フォーサイトラボ PBL-F　担当教員：三浦 麻子

▶ウェブサイト：https://pbl-f.hus.osaka-u.ac.jp/

▶社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：ワークショップ 3 件／のべ 40 人

JR 駅に設置されている「みどりの窓口」の混雑解消を目的として、ステイクホルダーである JR 西日本テクシアおよび神戸機関区（新神戸駅）との共同事業を実施した。春夏学期には第 1 回ワークショップを開催して顔合わせを含む準備作業を行い、8 月には新神戸駅で利用客を対象とするフィールド調査を実施し、秋冬学期には第 2 回ワークショップを開催してその分析結果を踏まえた具体的な介入策を提案した。その後、現在に至るまで、現場への実装を目指して現場とのすりあわせを行っているところである。

◎子どもの安全ラボ　担当教員：中井 宏

2024 年 6 月 30 日、「事故・ケガで我が子を死なせないために子どもを全力で守る本」（いそっぷ社）を発行した。

子どもの視野の狭さを視覚的に分かりやすく伝えるための啓発ビデオ（https://app.hus.osaka-u.ac.jp/introduction/prevent-child-injury/ ）を作成したほか、自転車安全教育のルーブリックを作成するため、京都教育大学の先生と協働し、その素案を作成中である。

この他、以下のような、子どもの事故防止のための啓発・実践活動を進めている。

■委員・講演・研修等

- 香川県教育委員会 交通安全教室講習会　講師
- 大阪大学医学部保健学科「学校保健学」 ゲストスピーカー
- 大阪市ファミリーサポートセンター援助会員養成講座　講師
- 大阪府福祉部子ども家庭局主催保育者研修　講師
- 神戸市立西郷小学校 PTA 講演会　講師
- 神戸市立灘小学校5,6年生対象特別授業（水難事故予防）　講師
- 神戸市立すずかげ幼稚園 PTA 講演会　講師 等

■教材等監修

- NHK 大阪製作動画「知ってる？こどものキケン」 アドバイザー
- ナブテスコ株式会社主催「自動ドア安全教室」
  イベント企画アドバイザー
- 日本ライフジャケット協会運営アドバイザー

■メディア出演

- TBS THE TIME 「好奇心」が影響、興味のあるものに一目散に走る傾向
- 読売テレビ す・またん　6 月　注意！子どもの交通事故
- RNC 西日本放送ニュースエブリィ　子どもの事故解説　他

◎老いと死の研究ラボ　担当教員：権藤 恭之

▶社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：１件／100人

日本心理学会と共催で公開シンポジウムを開催した。

https://psych.or.jp/event/sympo2024_1/

茨木市老人クラブ連合会との交流イベントを行った。

高齢者研究への理解を広げるため、いくつかの企業と情報交換を行った（資料なし）、100 歳は世界をどう見ているのかとい書籍を出版し、マスコミの取材に応じた。

https://www.poplar.co.jp/book/search/result/archive/8201262.html

読売新聞に研究の紹介された。

https://www.dailyshincho.jp/article/2024/11091057/?all=1

日本応用老年学会が主催する、ジェロントロジー検定に協力した。

https://sag-j.org/kentei/index.html

◎緒方らぼ　担当教員：川端 亮

▶社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：6 件／約 300 人

2024 年 5 月 3 日　朝霧湖マラソンで出展とお手伝い
5 月 3 日　ホームカミングデイで「緒方洪庵」の販売
7 月 16 日　大阪大学 LINKS で「緒方洪庵」が手土産に採用される
5 月 18 日　がいなんよ大学 in のむら　第 16 講を実施
7 月 6 日　がいなんよ大学 in のむら　第 17 講を実施
7 月 24 日　能登のお酒を飲んで応援する会
9 月 22 日　がいなんよ大学 in のむら　第 18 講を実施
10 月 19 日　蘭医学サロン海堂尊「蘭医繚乱　洪庵と泰然」刊行記念「大阪適塾の実像、現在から未来への架け橋」にて緒方洪庵を販売
11 月 16 日　がいなんよ大学 in のむら　第 19 講を実施
11 月 28 日 29 日　乙亥大相撲のお手伝い
2025 年 3 月 7 日　朝日新聞社主催「大学 SGGs ACTION! AWARDS オーディエンス賞」受賞
3 月 15 日　がいなんよ大学 in のむら　第 20 講を実施
3 月 25 日　卒業式で緒方洪庵を販売
クラウドファンディング「災害復興のまち野村で大学生が活躍できる持続可能なシステムを作りたい」

◎哲学の実験オープンラボ　担当教員：野尻 英一

▶ウェブサイト：https://exphopenlabo.hus.osaka-u.ac.jp
▶社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数： 5 件／ 170 人（オンライン参加を含む）
▶国際シンポジウムの件数と参加人数：1 件／ 15 人

前 3 年度から運営を継続し、登録メンバーは 140 人を超え、企画運営員は 19 名、教員・学生・卒業生が哲学活動に携わる中規模プラットフォームとして、安定期に入った。学生によるプロジェクト活動が自律的に稼働している。公認プロジェクトは昨年度より 2 つ増加し、10 が稼働中である。うち 9 つは学生による研究会（ラカンと現代社会研究会、マルクス主義的社会理論研究会、現代思想におけるハイデガー研究会、マイクロアグレッション関連文献読書会、人類学基礎勉強会、美的近代研究会、現代思想研究会、科学哲学の因果性研究会、カント批判哲学研究会）、一つは教員科研費による研究会（ジジェク研究会）である。

ラボ公式イベントとしては 6 件が、一般に開かれた学際的、国際的イベントとして行われた（「ワークショップ・エピステモロジーの明日へ」「市田良彦『フーコーの哲学』合評会」「美馬達哉氏講演会　傷つきし者は誰か 欠損とエンハンスメント」「横田祐美子氏講演会 プレリュード・ノン・ムジュレ わたしの哲学」「シンポジウム：生活の思想」「黃冠閔先生による特別講演会」）。

◎地域の食とプラネタリーヘルス　担当教員：河森 正人

▶社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：2 件／計 40 人

本プロジェクトは、地域に根ざした食の探究を通じて、人と環境の双方の「健康」を目指す「プラネタリーヘルス」の実践にむけた学びと発信を行うことを目的に、2022 年度より活動を開始した。「地域の食」を探求するうえで、調査地としたのは瀬戸内地域である。瀬戸内地域は、その自然豊かな景観をもつ一方、高度経済成長期の工場誘致の加速によって工業地帯周辺で環境汚染が深刻化した歴史もあり、環境保全の観点から、日本で初めての国立公園に指定された地域でもある。そして、近年では芸術祭などのイベントも取り入れながら、観光による地域創生が活発になされている。

今年度は瀬戸内地域の 3 か所（岡山県玉野市、香川県直島町・小豆島町）への共創フィールドワークを実施した。共創フィールドワークは、地域の人々（本プロジェクトでは、食に関わる団体や市民）とともに探求し、学びあう形で行われた。今年度は特に岡山県南部の郷土食とされる「ばら寿司」の歴史と変化、また、小豆島のオリーブを中心とした循環型農法を担う「オリーブ牛」に着目した調査を行い、地域の食の変容と文化背景について議論を重ねた。

■　フィールドワーク参加学生数：7 人

■　協力団体
- 岡山県玉野市観光協会
- 一般社団法人瀬戸内 RE・SORT
- 一般社団法人全日本伝統文化後継者育成支援協会
- 一般社団法人デスティネーションせとうち

■　研究成果
瀬戸内地域の食に関する卒業論文 2 本

■　研究成果報告ワークショップ
2025 年 2 月 5 日

地域の食に関する研究成果報告ワークショップ
（岡山市南区 2025年2月5日）

岡山市南区（福富西地区老人クラブ）にて、本学の学生 4 名が参加して上記の研究成果を報告し、地域の高齢者約 30 人が参加し共に意見を交わすワークショップを実施した。

◎全国人間科学系部局の連携と活動継続化　担当教員：西森 年寿

▶社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：1 件／ 40 名程度

学内で全国人間科学系部局連携ネットワーク委員会を 2 回開催することを通して、以下の 3 件の活動を行った。

① 会報『人間科学』創刊号の発行
2024 年 11 月に 33 ページ、カラー版 pdf にて刊行し、参加大学に配布し、あわせてウェブ公開した。
（https://hs-inet-j.humsci-waseda.jp/）

② ネットワークの公式ロゴを作成した。

③ 第 2 回フォーラム人間科学（年次総会）の開催
2024 年 12 月 7 日に筑波大学で開催した。第 1 部「人間科学の最前線」、第 2 部「人間科学とは何か」では 4 件の研究報告がなされた。その後、第 3 部として参加大学による年次総会と情報交換会を開催した。

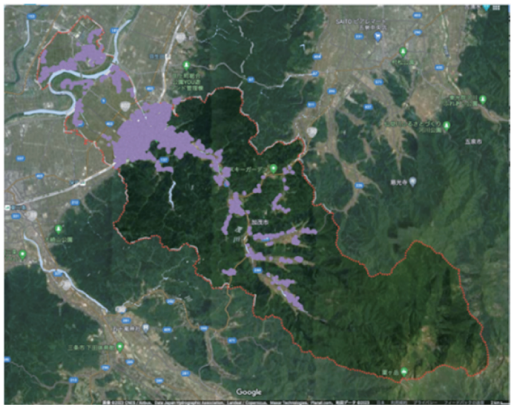
◎縮退社会ラボ　担当教員：村田 忠彦

▶ウェブサイト：https://www.c3s.srl.shibaura-it.ac.jp/spd/投稿/
▶社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：６件／のべ 30 名
▶国際シンポジウムの件数と参加人数：対面 40 名、ハイブリッド参加者 84 名

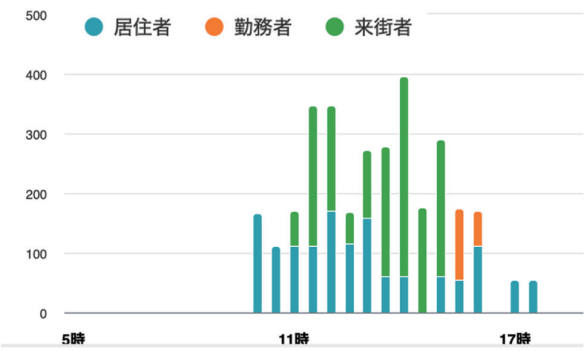
本オープンプロジェクトは、現代社会を成長発展社会と捉えるのではなく、少子高齢過疎化など縮退を余儀なくされている社会～縮退社会～と捉え、「尊厳ある縮退」をキーワードとして、縮退社会におけるコミュニティの変容過程、および、住民や社会の縮退に対する受容過程を検討し、尊厳ある縮退を実現するための実践的方略を導出する。尊厳ある縮退同好会を拠点として、先行研究を基にした概念整理、事例収集、過疎地、および、都市部の人口減少地域へのフィールドワーク、人口シミュレーションなどを実施してきた。プロジェクト代表者の村田忠彦は、2023 年度に開始した JST 未来社会創造事業デジタル社会実験プロジェクトにおいて、京都府八幡市、新潟県加茂市を対象としたデジタル社会実験の構築を行なっている。2024年度は両市の市職員と会合を重ね、人口減少に直面する自治体のニーズ把握を行ってきた。JST のプロジェクトでの研究成果を日本国内の他の地域に展開するために、縮退社会ラボの枠組みで検討を重ねている。これらの取り組みに対して、本ラボでの研究会を通じて、デジタル社会実験だからこそ、どのように少数派の意見を取り上げるかを考えたい、デジタル社会実験やゲーミングを通じて、ステークホルダーの雰囲気がどのように変わったかを知りたい、個人の心理と社会の心理をどのように組み込むかを考えたい、という示唆が得られた。

オープンプロジェクト研究会
「JST 未来社会創造事業におけるデジタル社会実験の進捗」（4 名）

加茂市ワークショップ・会議
2024年3月22日　加茂市施策に関する WS（市職員対象６名）
2024年5月15日　施策の可視化 WS（市職員対象６名）
2024年8月2日　加茂市 WS 分析会議（市職員６名）
2024年12月25日 加茂市 WS 分析会議（市職員２名）
2025年2月14日　加茂市調査会議（市職員２名）
2025年4月17日　加茂市デジタル社会実験方針会議（市長・副市長・市職員８名）



人口分布を考慮したシミュレーション



時間帯別・訪問者種別施設訪問者数

◎災間社会ラボ　担当教員：宮本 匠

2019 年、2021 年と続けて水害で被災した佐賀県武雄市で活動する一般社団法人おもやいの活動に参加し、災害が立て続けに起こる地域における課題と対応について研究を行った。また、おもやいが、能登半島地震・水害の被災地での活動も行うことになったため、阪神・淡路大震災を機に設立された被災地 NGO 協働センターがもうけた七尾市小牧の拠点を中心に、おもやいのメンバーらと能登でも活動を行った。また、2023 年に水害で被災した佐賀県内の農家らへの支援をおもやいが行ったため、そこでの支援状況の把握と、支援を受けた農家への聞き取りとアンケート調査をおもやいとともに行った。

◎みんなのフィールドエソロジーラボ　担当教員：山田 一憲

▶社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：14 件／3,211 名

【一般市民向けの活動】

① 7 月 20-21 日に科学技術館で開催された「博物ふぇすてぃばる！10」にて、行動観察体験を提供した。450 名の訪問者に「行動観察のしおり」を配布した。

② 9 月 28-29 日に京都市勧業館みやこめっせで開催された「いきもにあ 2024」にて、行動観察体験を提供し、270 名の訪問者があった。

③ 10 月 5 日にオンラインイベント「淡路ザルセミナー～淡路ザル観察公苑＆大阪大学人間科学部～：握れる手、つまめる指（サルの暮らしのお話いろいろ #1）」を開催し、1409 回の視聴数があった。

④ 11 月 9-10 日に中部学院大と東山動植物園で開催された「SAGA26」にて、行動観察体験を提供し、50 名の訪問者があった。

⑤ 11 月 16-17 日に大阪市立自然史博物館で開催された「大阪自然史フェスティバル 2024」にて、行動観察体験を提供し、300 名の訪問者があった。

⑥ 3 月 8 日にオンラインイベント「研究成果報告会 2025 ～淡路ザル観察公苑＆大阪大学～」を開催し、フィールドワークによって書き上げた卒業論文の成果を、野猿公苑の管理者、ボランティア、来園者の方々）にフィードバックする報告会を開催した。476 回の視聴数をがあった。

【学校や地域団体との連携活動】

小学校、高校から依頼を受け、大学院生と教員が野生ニホンザルの観察会を開催した。

⑦ 7 月 24 日に神庭の滝自然公園（岡山県真庭市）において、岡山県立岡山一宮高等学校の 1 年生 83 名を対象とした、ニホンザルの行動観察実習を大学院生と教員が行った。

⑧ 12 月 17 日に淡路島モンキーセンター（兵庫県洲本市）において、甲賀市立小原小学校 30 名を対象とした、オンラインによる行動観察会を開催した。
岡山県立勝山高等学校の生徒と真庭市立勝山小学校の4年生を対象にした「サルサミット 2024 ～神庭の滝でサルを観察しよう～」を開催した。阪大の大学院生からサルの行動観察法を学んだ勝山高校の生徒が、勝山小学校の児童と一緒に神庭の滝自然公園に来て、次は高校生が児童にサルの行動を教えるという実習を行った。

⑨ 12 月 24 日に岡山県立勝山高等学校の生徒 27 名を対象に、大学院生が「ニホンザルの社会」と「行動観察法」について事前学習となる講義を行った。

⑩ 1 月 7 日に勝山高等学校の生徒 27 名を神庭の滝自然公園に招き、「ニホンザルの行動観察実習」を行った。

⑪ 1 月 7 日に勝山高等学校において、行動データの解析実習を行った。生徒 27 名が参加した。

⑫ 1 月 7 日に、勝山高等学校に一般社団法人真庭観光局の須田事務局長、中村次長を招き、高校生 27 名と一緒に「神庭の滝を盛り上げる方法を考えよう」というタイトルのサイエンスカフェを行った。

⑬ 1 月 23 日に勝山高等学校の生徒 20 名と勝山小学校の児童 27 名を神庭の滝自然公園に招き、合同観察会を行い、高校生が小学生にニホンザルの行動観察の指導と行動の解説を行った。

【動物園や他大学との連携活動】

学術連携協定を締結している NIFREL（大阪府吹田市）から依頼を受け、コラボイベントを開催した。

⑭ 12 月 26 日に NIFREL にて「～ニフレル×大阪大学大学院人間科学研究科コラボイベント～生きものの行動観察博士になろう！」開催した。事前に比較行動学研究室の大学院生が大阪公立大獣医学部の学生と NIFREL 職員に行動観察法を教え、10 名の行動観察チューターの育成を行った。開催日には、チューターが一般の来園者 40 名と一緒に、ワオキツネザルを観察し、データを収集・解析し、行動観察がワオキツネザルの飼育管理や生態の理解に貢献できることを紹介した。

【参考リンク】

淡路ザルセミナー：https://x.gd/wyMCT
研究成果報告会 2025：https://x.gd/YT8V9
サルサミット：https://x.gd/al4lU
サルサミット：https://x.gd/YeSEs
サルサミット：https://x.gd/T5W7w
ニフレルコラボイベント：https://x.gd/KDymm
ニフレルコラボイベント：https://x.gd/Xxqg2

◎記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ（記憶の継承ラボ）
担当教員：三好 恵真子

▶ウェブサイト：https://relay-memories.hus.osaka-u.ac.jp/

▶社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：5 件
（長崎訪問：1 回、沖縄訪問：3 回、大阪城周辺でのフィールドワーク：1 回）／50 人（現地での交流を含む）

▶国際シンポジウムの件数と参加人数：1 件
シンポジウム「ポスト体験時代の記憶の継承―アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ―」／参加者総数：100 名（参加申し込み 127 名）

アジア・太平洋戦争の終結から約 80 年が経過し、戦争体験者の直接的な証言が聞き取れなくなる「ポスト体験時代」に向かいつつある現在、戦争・戦後体験や記憶の継承が急がれている。こうした社会的背景のもとで、長崎や沖縄、水俣、福島等の各地の現場で日々尽力する実践家たちからこれまで私たちが受け止めてきたのは、それぞれの地域が記憶の継承を巡って抱えている複雑な「戦後」の現実である。それゆえ、人びとが営み続けてきた戦中戦後の生活の現場を「複数の歴史空間が重層する場」として捉え直しつつ、私たちが生きている現在との繋がりを模索していく必要がある。

そこで、長崎の被爆校舎から原爆体験を伝え継ぐ平和案内人たちとの対話を深めた昨年度の活動成果を踏まえて、今年度は沖縄で地域史の編纂に長年尽力してきた現場の実践者たちを招きつつ、後述するグローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクトを基盤としたシンポジウムを開催するなど、戦争・戦後体験とその記憶をアジア地域史の視座から対話へ拓いていく取り組みを展開した。加えて、若い世代の学生たちが主体となり大阪市内においてもフィールドワークを実施することにより、私たちが日常の暮らしの中で見過ごしてしまいがちな戦禍の記憶についても確かめ直すことが出来た。以下、本年度の活動内容の概要を紹介していく。なお、下記の活動については、以下の「記憶の継承ラボ」のホームページにも掲載しており、併せて参照されたい。

【シンポジウム「ポスト体験時代の記憶の継承―アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ―」の開催（2024/10/26）】

2024 年 10 月 26 日（土）に、「ポスト体験時代の記憶の継承―アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ―」（主催：大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター・「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ（記憶の継承ラボ）」；大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト「21 世紀課題群と東アジアの新環境:実践志向型地域研究の拠点構築」、共催：沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」；大阪大学中国文化フォーラム）をオンラインにて開催した。

写真 1
沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」

本シンポジウムでは、沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」（写真 1）に関わりながら長年にわたり沖縄市史編集に尽力し、体験者の貴重な「語り」の聞き取りも行ってきた登壇者のお二人が沖縄市の戦後史を伝えていくことに込める思いについて、貴重なお話を頂いた。また、院生による研究成果報告と現地での記録写真を併せた応答も行いながら、「基地の街」、「戦後沖縄の縮図」と形容される沖縄市コザに暮らした人びとの模索から浮かび上がる複雑な戦後史とその現在への連続性について参加者と共に議論を深めた。当日は休日にも関わらず、学内外からおよそ 100 名の方々に参加して頂い

た。本シンポジウムの総括は、昨年度末に発刊した成果物（三好恵真子・吉成哲平編『ポスト体験時代の記憶の継承―アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ―』OUFC booklet No.19、大阪大学中国文化フォーラム、2025 年）としてまとめている。

【沖縄訪問（2024/6/11～6/17、10/12～10/15、2025/2/15～2/17）】

前述した通り、沖縄市は嘉手納基地の門前町として発展し、基地から派生する独自の文化を築いてきた街として知られている。これまで私たちは、沖縄市コザにある沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」にて沖縄市史編集に尽力してきた実践家たちとの交流を深めつつ、沖縄戦後にコザの街で暮らす人びとが切り拓いてきた歴史について受け止めてきた。そこで、以上の現場での学びをより広く共有していくために、2024 年 6 月に沖縄を再訪し、シンポジウム「ポスト体験時代の記憶の継承―アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ―」（2024 年 10 月 26 日開催）への登壇について、実践家のお二人に打診したところ快諾を頂いた。また、シンポジウム開催直前の 10 月の訪問では、シンポジウム第 1 部②「現場からのレスポンス「コザの戦後史の継承に込められた思索の軌跡」」にてお話頂く内容を最終調整し、「ヒストリート」から当日オンラインで登壇して頂くための準備等を行った。そして、シンポジウム終了後の今年（2025 年）2 月には、総括としてのブックレットに掲載するシンポジウムの文字起こし原稿をご確認頂き、当日の温度感を残しつつもより充実した内容へと推敲して頂いた。

【「「記憶の継承ラボ」フィールドワーク企画：大阪空襲の戦跡を歩く」の開催（2024/8/6）】

大阪城が建つ地域一帯には、明治期から敗戦まで大阪砲兵工廠があり、アジア・太平洋戦争末期には度重なる空襲を受けたことで知られている。そこには、ひとびとの「戦後」の思想的営為を規定した鮮烈な空襲・廃虚体験があったことが窺える。そこで、このフィールドワークでは大阪城近くにある平和博物館「ピースおおさか」とその周辺に今なお残る戦跡を訪れることで、大阪空襲の記憶が今日いかに伝えられつつ、その一方では忘却も進んでいるのかについて学びながら、参加者との議論を深めた。

【長崎訪問（2024/8/8～8/10）】

「長崎原爆の日」である 8 月 9 日に合わせて、2021 年から毎年実施している長崎・城山小学校平和祈念館への訪問を今年も行った。私たちが現地でいつもお世話になっている実践家の方々による案内のもとで長崎市内での「まち歩き」も行い、市内各所で保存されている原爆遺構を見学した（写真 2）。これらの活動を通じて被爆の記憶の重みについて実践家たちと対話することで、長崎から被爆の実相を生涯伝え続けた人びとの尽力への理解を深めた。

写真 2
長崎でフィールドワークの様子

■その他、書籍や論文等の活動成果一覧

【共編著】

三好恵真子・吉成哲平編『ポスト体験時代の記憶の継承―アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ―（「21 世紀課題群と東アジアの新環境」シンポジウムシリーズ③）』OUFC Booklet Vol. 19、2025 年、大阪大学中国文化フォーラム
https://hdl.handle.net/11094/100627

【共著】

吉成哲平「原爆がなし続けてきた時間の厚みを「私たち」の問いとして拓く展示へ」、長崎の証言の会編『証言 2024――ナガサキ・ヒロシマの声』汐文社、26-27 頁、2024 年

【論文】

吉成哲平・三好恵真子「再帰的な撮影行為を介して拓かれていく「記憶の継承」の可能性―写真家たちが表現し続けた「戦後」を「写真実践」より問い直していく意味―」『大阪大学大学院人間科学研究

科紀要』51、45-73 頁、2025 年
https://doi.org/10.18910/100817
吉成哲平・三好恵真子「復帰後の沖縄の現実から問い直された「戦後」―写真家 東松照明が島々で確かめていった生活の実感―」『生活学論叢』46、印刷中、2025 年
王石諾・三好恵真子「日中「二つの東北」の痛みに向き合いながら生を営むという選択―「単位制」の弱体化や戦争の痕跡を受け止めつつ災害を乗り越えようとする結婚移住した中国人女性の歴史実践―」『生活学論叢』45、15-29 頁、2024 年
https://doi.org/10.24528/lifology.45.0_15
王石諾・三好恵真子「日中「二つの東北」を生きる結婚移民の女性たち―ライフストーリー法から拓かれていく「歴史実践」―」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』51、1-25 頁、2025 年
https://doi.org/10.18910/100815

【HP 掲載】

吉成哲平「REPORT【記憶の継承ラボ】「ポスト体験時代の記憶の継承―アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ―」開催報告、2024 年
https://www.hus.osaka-u.ac.jp/mirai-kyoso/ja/reports/250206a/

◎プロジェクト SOUP（Share Our Unique Perspectives）
担当教員：安元 佐織

▶社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：4 件（うち 2 件は毎月 1 回開催）／90 人程

「プロジェクト SOUP」は、人間科学研究科の学生に部局内外での多文化交流の場を提供することで、学内での学びと社会を繋ぐ Public Sociology（公共社会学）の実現を目指しています。本年度は、昨年度構築した 3 つのプロジェクトを発展させることを目標に、人間科学研究科の異なる学年の学生や留学生が独創的な企画を開催しました。具体的には、①地域高齢者との世代間交流企画@吹田市：グローバルビレッジ津雲台の高齢者住宅で、毎月 1 回高齢者との交流企画を実施しました。②地域住民との国際交流企画@吹田市：岸辺の施設で毎月 1 回英会話教室を開催しました。③地域住民との世代間交流企画@伊丹市：2025 年 2 月 9 日に幅広い年齢の地域の方々と「幸せ」について語り合う交流企画を実施しました。④地域高齢者との世代間国際交流企画@浜松市：2024 年 11 月 21 日に漁師町の高齢者と中学生と一緒に「人生観」について語り合う交流企画を実施しました。様々な研究室の学部生と大学院生（日本人学生＆留学生）がアイデアを出し合って作り上げた企画は、地域の方々に大変好評で、2025 年度の開催依頼もいただきました。

◎Tsunami DRR（Disaster Risk Reduction）Lab.　担当教員：杉本 めぐみ

▶社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：7 件／約 20,000 人

▶国際シンポジウムの件数と参加人数：3 件／900 人

本プロジェクト 2 年目に 2024 年 11 月インド洋津波 20 周年にインドネシアで開催された UNESCO-IOC 国際津波グローバルシンポジウムにおいて本活動が最優秀ポスター賞を受賞した。これをきっかけにインドネシア気象庁とユネスコ IOC の協力を得、Revaitalizaion Paln として大きく始動することになった。他方で本プロジェクトの参考元になった 1854 年安政東海・南海地震の津波の記念碑「大地震両川口津浪記」が大阪市浪速区を含めた津波防災フィールドトリップを主に阪大全学の 1 回生向け授業等で約 60 名にし、津波防災の社会的文化的インフラが市民の手によって整備されてきた災害歴史的経緯について国際的だけでなく阪大生も学ぶ機会を得た。具体的な始動として、18 年前にアチェ州に建設した石碑 85 基の保存状況をインドネシア気象庁と調査し、現地市長と保存・修復および資産登録の手続きについて進めていくことの取り決めも行った。さらにインドネシア全土の災害記念碑を GIS マップに登録する仕組みづくりをインドネシア地理院や災害庁も含めて協議が進展することになった。12 月 20 周年インド洋津波追悼式典でプロジェクト概要を A4 で 500 枚参加者と A2 サイズポスターを関係者に 20 部配布した。

ユネスコIOCグローバル津波防災シンポジウム最優秀ポスター賞

インドネシア気象庁局長室で本プロジェクト打合わせ

現地新聞にインド洋津波20周年追悼式典の特集にてプロジェクト紹介

以下主な掲載新聞等 URL

1. 邦人紙じゃかるた新聞ユネスコー IOC グローバル津波シンポジウム最優秀ポスター賞紹介：
   https://www.jakartashimbun.com/free/detail/68353.html
2. インドネシア共和国アチェ州ローカル新聞インド洋津波20周年式典紹介にて
   プロジェクト活動紹介掲載
   https://www.dialeksis.com/aceh/dua-dekade-pasca-tsunami-prof-sugimoto-ingatkan-fungsi-tugu-tsunami-di-aceh/
3. インドネシア紙掲載 Revaitalization plan キックオフシンポジウム紹介
   https://atjehwatch.com/2025/03/04/bmkg-ingatkan-pentingnya-tugu-tsunami-aceh-2004-sebagai-bekal-siaga-bencana/
4. CNN 津波防災コメント：
   https://edition.cnn.com/2024/08/12/asia/japan-nankai-trough-earthquake-intl-hnk/index.html
5. インドネシア気象庁公式インスタグラムにて本プロジェクト紹介
   https://www.instagram.com/p/DHDWJ67zrR4/?utm_source=ig_web_copy_link&igsh=MzRlODBiNWFlZA%3D%3D

◎対話で進めるディスアビリティ・インクルージョン　担当教員：中井 好男

▶社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：ともに食卓／約 50 名
ネイチュア・フィーリング／約 60 名　　ろう者映画鑑賞会・対談会／約 90 名

2024 年度の IMPACT オープンプロジェクトとして実施できたものは、①Book カフェ、②ネイチュア・フィーリング、③ろう者による映像表現活動を考える映画鑑賞会と対談である。Book カフェは豊中キャンパスのカフェミュルチラングと「ともに食卓」（於　発酵と味噌と麺 みつか坊主）内で計 2 回開催した。学内での開催以外にも、社会福祉法人などの協賛によって実施されているイベントにおいて Book カフェを行うことで、本を介した学外の方々との交流の機会を設けることができた。②のネイチュア・フィーリングは NPO 法人ヘレンケラー自立支援センターすまいる様のご協力のもと、すまいる利用者の盲ろう者の方々に吹田キャンパスまでお越しいただき、本学学生とともに自然観察を行い、障害を超えた交流と自然の捉え方の違い等を学ぶ時間を持つことができた（https://kankyokyoseilab.net/activities/naturefeeling/）。最後の③はろう者監督である横尾友美氏制作の映画「わたしたちに祝福を」を鑑賞し、ろう者監督である今村彩子氏、聴者であるがろう者に関する映画を作成している監督谷進一氏とろう者による映像表現について対談を行った。ろうの方々や手話・ろう者との関係がある方々、関心をお持ちの方々が集い、ろう者にまつわる社会課題等について議論することができた。

◎多様性の中のウェルビーイング　担当教員：山田 陽子

▶社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：計 2 件／80名
1）ビッグアイ アーツセミナー×阪大 みえない世界を表現する 中川圭永子の世界／40名
2）人の最期を考える　生き方死に方を考える社会フォーラム／40 名

昨年度より継続して、今年度も現代の働き方と「健康な」労働者像を問い直し、ウェルビーイングの多様性について社学連携のもとに議論する場を創出した。ウェルビーイングの多様性について検討し、広く社会に発信するために開催したイベントは次の通りである。

1）ワークショップ「ビッグアイ　アーツセミナー×阪大　みえない世界を表現する　中川圭永子の世界」開催、参加者 40 名。2024 年 8 月 24 日、大阪大学中之島センターセミナー室 7 D。国際障害者交流センタービッグアイとの共催のもと、盲目の画家・中川圭永子氏を迎え、学生・研究者・一般の方を対象にしたワークショップを開催した。
講演テーマ「視覚障害を抱えながらの表現活動」
・視覚障害者が日常生活において使用している便利グッズの紹介と、それをどのように表現活動に応用しているかについて
・35 歳で障害者認定を受けた後、見えづらさが進んでいる。見え方の変化と表現活動について。白い杖を持った表現者への道のりについて。

（フライヤー）中川圭永子の世界

2）シンポジウム「人の最期を考える」を『生き方死に方を考える社会フォーラム』と共催した。参加者 40 名、於・大阪大学中之島センター佐治敬三ホール。
医師の石蔵文信氏の生前最後の数か月のインタビュー映像を参加者とともに鑑賞した後、医師で作家の久坂部羊氏を迎え、「どのように死ぬのか」に関する講演のあと、研究者・一般の方を交えたディスカッションを行った。

（シンポジウム）人の最期を考える

◎ACE ラボ　担当教員：三谷 はるよ

▶ウェブサイト：https://acelab.site/

▶社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：2 件／参加者 110 人（視聴 16,700 人）

今年度は、「ACE ラボ」の WEB サイトを作成し、子ども期の逆境体験（ACE）に関する学術研究の成果や各種イベントについての情報発信を強化した。

また、ラボ公式の社学連携イベントとして以下 2 件を行った。

① 2024 年 5 月 28 日に、認定 NPO 法人フローレンスと共催で「見えないマイノリティー『ACE サバイバー』を考える――こども時代の有害体験が人生に与える影響とは」（オンライントークイベント）を開催した。リアルタイムでフローレンス社員やフローレンス寄付者が参加し、イベントの様子は YouTube で一般公開された。
https://www.youtube.com/watch?app=desktop&v=AHzS7Dz0MIo

② 2024 年 11 月 16 日に、認定 NPO 法人アクセスと共催で「子ども時代の辛い体験は一生を左右する？！――日本とフィリピンで、私たちにできること」（オンライントークイベント）を開催した。リアルタイムで子どもの権利侵害に関心がある人や子どもの育ちに関わる人などが参加し、イベントの様子は YouTube で一般公開された。
https://www.youtube.com/live/gNz3bODD600?si=hemI-txl33NrsPhU

◎多文化共生とオープン・ライブラリー・プロジェクト　担当教員：近藤 和敬

▶社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：ワールドカフェ 4 回／参加者各 20 名
キャンパスでの大学案内／参加者 10 名　　フィールド哲学講座／参加者 40 名

今年度の活動では、まずは、本活動のリサーチアシスタントらの働きによりいくの多文化フラットの配架図書を登録し、職員や利用者、および学生に貸出することができる体制を整えることができた。

その活動をとおして職員や事務局長からの聞き取りにより、対話の機会を増やしたいこと、哲学対話のようなことをしてみたいなどの希望があることがわかってきた。

そのため、本年度は、まず、大学院の授業と関係づけながら、7 月にワールドカフェ講座とワールドカフェを行った。

また 10 月からは、学部の授業とも関係づけながら、RA や学部学生らと NPO 職員らを交えたワールドカフェを 2 回おこない、それにたいする職員および事務局長らからのフィードバックをもらった。

また、哲学対話を始めるにあたって、近年国外で盛んになりつつあるフィールド哲学についての調査報告会を、いくの多文化フラットでおこない、多くの参加者をえた。

◎発達と教育のためのプレイフル・ラボ　担当教員：萩原 広道

▶社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：9 件／のべ 130 人（共催イベント含む）
※こども園・療育センター訪問：5 件／各回およそ 8 人
共催イベント：2 件／のべ 50 人　　解析セミナー：1 件／のべ 40 名

本プロジェクトは、乳幼児期から青年期にかけての発達や教育を、楽しい「遊び」を通じて支援することを目指して、教材の開発・研究、およびそのためのネットワーク形成を実施することを目的としています。初年度となる 2024 年度は、ネットワーク形成や、関係者間の共通言語の創出・整備に注力してきました。具体的には、音声解析に用いられるソフトウェア Praat の講習会を実施したり、地域のこども園や療育センターを複数回訪問したり、ゲゲーム教育に関するイベントを外部団体と共催で実施したりしました。

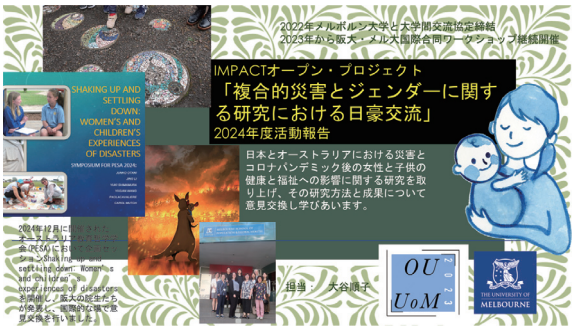
●Praat 講習会：https://www.hus.osaka-u.ac.jp/mirai-kyoso/ja/events/240819a/
●Ulinx イベント：https://readyfor.jp/projects/DAIGAKU_BG/announcements/360605
●関西ゲームと学び研究会イベント：https://readyfor.jp/projects/DAIGAKU_BG/announcements/360454

イベントの様子

◎複合的災害とジェンダーに関する研究における日豪交流
担当教員：大谷 順子

▶国際シンポジウムの件数と参加人数：1 件／25 人
（学会参加者は 300 人ほど、企画セッション参加者は 25 人ほど）

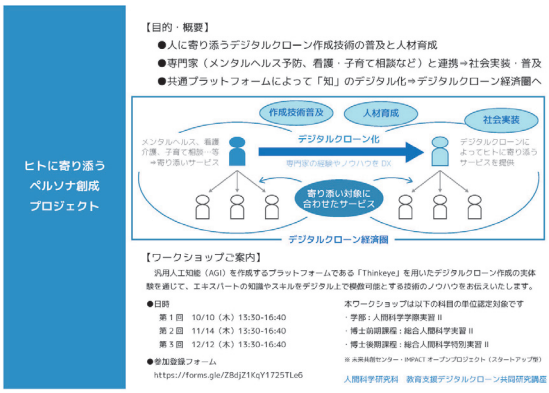
これまでの活動を踏まえ、オークランド大学・ミラノ大学・メルボルン大学の教員と大学院生とともに、2024 年 12 月に開催されたオーストラリア教育哲学学会（PESA）において企画セッション Shaking up and settling down: Women's and children's experiences of disasters を開催し、阪大の院生たちが発表し、国際的な場で意見交換を行った。また、2025 年大阪で開催される万博において「いのち会議」で発表する「いのち宣言」にアクションプランを寄与する準備を継続している。

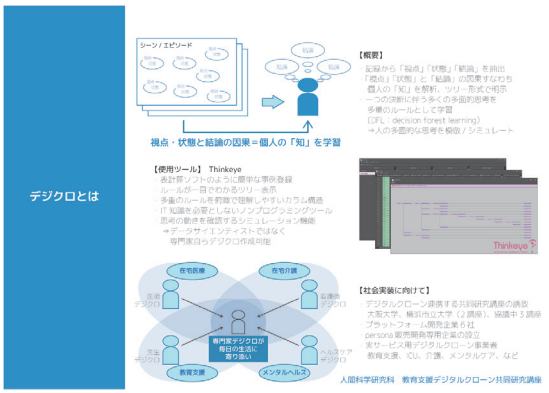


◎ヒトに寄り添うペルソナ創成プロジェクト　担当教員：平井 啓

▶社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：1 件／ 7 名

本年度は、汎用人工知能プラットフォーム「Thinkeye」を用いたデジタルクローン生成ワークショップを 3 回（10 月 10 日、11 月 14 日、12 月 12 日）実施し、学部生 1 名・大学院生 5 名・学外参加者 1 名の計 7 名が参加した。各回は 90 分の講義と 180 分のハンズオンで構成され、参加者はメンタルヘルス予防、看護相談、子育て相談といった領域を題材に、専門家の判断過程を再現する初期版デジタルクローンを完成させた。





4　研究事業

◆4. 1　研究会

未来共創センター「テーマ研究会」

未来共創センターでは、毎年テーマを１つ選び研究会を実施しています。2024 年度は「社学共創」をテーマに設定し、政策と現場、大学と現場という点に焦点を当てつつ、「社学共創」とは何かを探ることを目的として、計 3 回の研究会を開催しました。未来共創センターでは、2017 年 4 月に「大阪大学オムニサイト」（OOS）を開始し、共創知を生み出す「場」の創出を目指した取り組みを実施しています。また、大阪大学では、2024 年 4 月に博士課程の学生を対象とした「人文社会科学系オナー大学院プログラム」を開始し、このプログラムの教育課程を編成するユニットの１つとして「社学共創ユニット」を設けました。2024 年度の研究会の発表者と内容は、下記の通りです。

第 1 回テーマ研究会

坂口　真康「学校教育を通じた『社学共創』について考える―南アフリカ共和国の取り組みを事例に」
徳永恵美香「人文社会科学系オナー大学院プログラムの概要と取り組み」

第 2 回テーマ研究会―実践から共創を考える―

杉田　映理「MeW Project と社学共創」
山田　陽子「『社学共創』を考える」

第 3 回テーマ研究会―共創と社会的評価―

渥美　公秀　今井貴代子　内山志保
「社会的インパクト評価の実際　エディンバラ大学調査をふまえて」

◆4. 2　ジャーナル『未来共創』の発刊

2024 年度はジャーナル『未来共創』第 12 号を発刊しました。本誌の前身である『未来共生学』は、2012 年に始まった文部科学省博士課程教育リーディングプログラム「未来共生イノベーター博士課程プロクラム」のジャーナルとして創刊されました。ジャーナル『未来共創』第 12 号には論文 3 本、特集 3 本（特集論文 1 本、研究会報告 2 本）、研究ノート 1 本、報告 4 本、書評 1 本が掲載されています。特集「「社学共創」への共創的アプローチ」では、大学と社会が場を共有して新しい価値を創り出す「社学共創」について、その具体的な実践と意義に関する論文、研究会報告をご寄稿いただきました。

ジャーナル『未来共創』第 12 号
目　　次

発刊にあたって …… 西森年寿

≪論文≫
サルトルにおける愛の概念について ―『存在と無』における現象学的他者論を中心に
…… 赤木優希

新自由主義的な教育改革下における「文化に応じる教授法」－ニュージーランドの教師に着目して
…… 瀬戸麗

多様な困難を抱える若者の包摂に向けた取り組みに関する一考察
－デンマークのエフタスコーレ（efterskole）にみるリスク予防の機能に着目して …… 段畑実生

≪特集：「社学共創」への共創的アプローチ≫
特集にあたって－「社学共創」への共創的アプローチ …… 徳永恵美香・伊藤莉央

学校教育を通じた「社学共創」と「共生」
－南アフリカ共和国の Life Orientation の教科書と指導書を事例に…… 坂口真康

実践から共創を考える …… 杉田映理・山田陽子

社会的インパクト評価の実際－エディンバラ大学調査をふまえて
…… 渥美公秀・今井貴代子・内山志保

≪研究ノート≫
テクノ・エモディティ--出会いと社会性の破壊的イノベーション …… 山田陽子

≪報告≫
アムステルダムにおけるセックスワーカー・地域住民・観光客の共生のゆくえ
－「飾り窓地区」を中心としたフィールドワークから－ …… 岡田玖美子

震災後の商店街の活性化と社会的役割―野田村におけるフィールドワークを通じた考察
……内山志保・徐朶朶・劉笑疑

つながりを育み、受け継ぐ ―野田村から考える、災害復興の先にある関係人口の新たなあり方
……大﨑修平・福井悠斗・薮本佳奈・劉牧陽

横合地区の活性化--地域住民の不安と希望の観点から
……周萌・萩之内大・李睦

≪書評≫
石田光規『孤立不安社会―つながりの格差、承認の追求、ぼっちの恐怖―』 …… 萩之内大

編集後記 …… 磯島浩貴

5　教育事業

◆5．1　未来共創センター担当授業

本年度、未来共創センターは下記の授業を実施しました。

（1）フィールド科目

【学部】未来共創フィールド実習Ⅰ　春～夏学期
【学部】未来共創フィールド実習Ⅱ　秋～冬学期
【博士前期課程】未来共創フィールドスタディⅠ　春～夏学期
【博士前期課程】未来共創フィールドスタディⅡ　秋～冬学期

令和６年能登半島地震、2024 年花蓮地震、熊本・阿蘇の各被災地で地元関係者にご協力いただきフィールド実習を行いました。

医学系研究科の AED 実習の様子

（2）実践型学修活動

【学部】人間科学学際実習Ⅰ　春～夏学期
【学部】人間科学学際実習Ⅱ　秋～冬学期
【博士前期課程】総合人間科学実習Ⅰ　春～夏学期
【博士前期課程】総合人間科学実習Ⅱ　秋～冬学期
【博士後期課程】総合人間科学特別実習Ⅰ　春～夏学期
【博士後期課程】総合人間科学特別実習Ⅱ　秋～冬学期

震災から修復された京都大学阿蘇火山センターで大倉敬宏教授の説明を受ける

（3）人間科学学際研究特講

人間科学研究科の学際研究特講において、６時間分の授業を担当しています。学際事例紹介として医学系研究科と初めて DMAT 講義と AED 実習を実施しました。

（4）全学教育推進機構「学問への扉」

隔年で当センターが担当している学問の扉では、ミャンマーからの留学生を含め全学の１回生 17 名が、三菱みらい育成財団の助成で南海トラフ浸水予想エリアや安政大津波碑等の大阪湾沿岸のフィールドトリップも実施することができました。

大阪湾フィールドトリップ

（5）全学教育推進機構（総合）「大阪の防災」

令和６年度春学期に全学に開講した「大阪の防災」では１回生から吹田の工学研究科 M１と学年も様々な学生 38 名が履修しました。

◆5．2　『私の一冊』の発行

人間科学研究科の教員が、学生に読んでもらいたい本を一冊ずつ紹介する『私の一冊』を作成し、学生に配布しました。私の一冊は、必修科目「人間科学概論」で使用され、学生たちは掲載された書籍を選んでレポートにまとめて授業で発表しました。本を通じて学生と教員がつながるきっかけとなりました。

6　その他の活動

日付	タイトル	演者所属	氏名	場所
2024 年 5 月 11 日	市田良彦 『フーコーの〈哲学〉』合評会	リヨン第三大学、 獨協大学、京都薬科大学、 人間科学研究科、ほか	市田良彦、 近藤和敬 、 池田信虎 、 仲宗根大介、 清水雄大、 坂本尚志	第 404 講義室
2024 年 5 月 16 日	第 4 回人科・情報研究交流会	人間科学研究科、 情報科学研究科	設樂哲弥、 前川卓也、 八十島安伸、 古川正紘	情報科学研究科 A210／212会議室 （第 1 部） A110講義室 （第 2 部と懇親会）
2024 年 6 月 13 日	出前授業	人間科学研究科	勝野吏子	兵庫県立 小野高等学校
2024 年 8 月 8 日	はんだいラボ「～月経を楽しもう～ 親子で、友達で、生理をまなぶ実験教室」	人間科学研究科		EXPOCITY
2024 年 10 月 10 日 11 月 14 日 12 月 12 日	ヒトに寄り添うペルソナ創成プロジェクト「デジタルクローン作成ワークショップ」	人間科学研究科	伊藤庸一郎 上野太輔 平井　啓	テクノアライアンス棟 B308 教育支援デジタルクローン共同研究講座
2024 年 10 月 26 日	ポスト体験時代の記憶の継承－アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログー	沖縄市、人間科学研究科	沖縄市 史編担当、 人科関係者	オンライン
2024 年 11 月 7 日	大阪大学×国立台湾大学 第 2 回研究交流セミナー	台湾大学	Sue-Huei Chen	インターナショナルカフェ
2004 年 11 月 16 日	がいなんよ大学第19講 「教育」で地域をつくる～教育研究者 鈴木大裕さんの実践をもとに～	高知県土佐町町会議員	鈴木 大裕	本家緒方蔵（愛媛県西予市野村町）
2024 年 12 月 21 日	2024 年度公開セミナー 若者たちが学び育つ場所	東京外国語大学、金沢大学、大阪府立西成高等学校、立命館大学、中央大学、大阪公立大学、大阪大学	布川あゆみ、 本所　恵、 有江ディアナ、 山田勝治、 森ゆみ子、 柏木智子、 池田賢市、 辻野けんま、 園山大祐	中之島センター
2024 年 12 月 21 日	ワークショップ 「エピステモロジーの明日へ」	人間科学研究科、 鹿児島大学	池田信虎、 石長佑一、 上野隆弘、 近藤和敬、 宇佐美達朗	第 106 講義室
2025 年 2 月 10 日	講演会 傷つく身体から拡張する身体へ ーポストヒューマン時代におけるー	立命館大学	美馬達哉	第 106 講義室
2025 年 2 月 13 日	講演会 プレリュード・ノン・ムジュレ ーわたしの哲学	横浜美術大学	横田祐美子	第 106 講義室＋ Zoom

日付	タイトル	演者所属	氏名	場所
2025 年 2 月 20 日	月経研究会 ～多様な視点から考える月経～	国際日本文化研究センター、人間科学研究科	孫詩彧、 付若琳、 小島理紗子、 杉田映理	ラーニングコモンズ
2025 年 2 月 22 日	公開セミナー 何が子どもの社会参加を促進するか？ ー高校生の質問紙調査から 見えてきたものー	広島大学、大阪大学、筑波大学、追手門学院大学、お茶の水女子大学、京都教育大学	川口広美、 北山夕華、 古田雄一、 太田昌志、 大脇和志、 小栗優貴	Zoom
2025 年 3 月 4 日	台湾 國立政治大學 教授/中央研究院中國文哲研究所所員兼所長 黃冠閔先生 特別講演会	台湾 國立政治大學、中央研究院中國文哲研究所	黃冠閔	第 106 講義室
2025 年 3 月 7 日	朝日新聞社「大学 SDGs ACTION! AWARDS」最終選考 応募タイトル「災害復興のまち野村で大学生が活躍できる持続可能なシステムづくり」	大阪大学、愛媛大学	櫻井香織、 山田　澪、 樋田奨悟、 廣瀬美咲、 市原ほのか	
2025 年 3 月 16 日	生き方死に方を考える社会フォーラム 「人の最期を考える」	医師・作家	久坂部羊、 ほか	中之島センター
2025 年 3 月 20 日	シンポジウム生活の思想	大阪大学、甲南大学、広島大学	織田和明、 磯島浩貴、 平石知久、 井上　瞳	中之島センター

Ⅲ　OOS 協定活動からのお知らせ

朝日新聞「大学 SDGs ACTION! AWARDS 2025」で オーディエンス賞を受賞

一般社団法人 NEO のむらは、2025 年 3 月 7 日（金）に東京・浜離宮朝日ホールで行われた「大学 SDGs ACTION! AWARDS 2025」の最終選考会において、オーディエンス賞を受賞しました。広く様々な方々からオーディエンス投票というかたちで応援をいただき、全体の約 4 分の 1 を得票した結果、受賞することができました。応援をいただいた皆さま、ありがとうございました。

私たちは現在「災害復興のまち野村で大学生が活躍できる持続可能なシステムづくり」に、愛媛大学社会共創学部の学生主導で取り組んでいます。その取り組みを基に SDGs のゴール11「住み続けられるまちづくりを」に対して「『野村モデル』でまちづくりの担い手不足を解決したい」というタイトルで SDGs ACTION を提起しました。そして、1 次選考の段階では 109 件のエントリーがあったそうですが、そこから私たちもファイナリスト 12 候補のうちにご選出いただき、東京で発表できることになりました。

最終選考会での発表の様子

選考資料の提出やプレゼンテーション動画の提出にあたっては、大阪大学生が中心となって、愛媛大学生ともオンラインで密にやりとりを行いながら進めました。この準備の期間は、私たちの現在の取組みやこれまでに行ってきた活動について改めて見つめ直す機会となりました。経済面での「野村モデル」の実現可能性、現状目指している「野村モデル」の持続可能性、「野村モデル」が全国の地方に対して持つ意味などに関しては、考えていく中で課題もいくつか見つかりました。一方で野村の方々からメッセージをいただき、私たちが野村で行ってきた活動に意味があったのだと再認識することもできました。今後も野村に少しでも貢献できるように努めていくとともに、受け入れ続けてくださる野村の方々に感謝しながら、災害復興や災害伝承、まちづくりに関して学ばせていただこうという思いを強くしました。

結びに、今回の「大学 SDGs ACTION! AWARDS 2025」でのオーディエンス賞の受賞は、私たちの取り組みが改めて広く評価していただけた結果だと考えています。これを自信としながら、今後も野村地域自治振興協議会、愛媛大学とともに、NEO のむらとして活動を推し進めてまいりますので、よろしくお願いいたします。　　（文責：人間科学部 3 年 共生行動論　樋田 奨悟）

野村地域づくり活動センターに飾っていただいています

発行
大阪大学大学院人間科学研究科
附属未来共創センター
〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-2
2025 年 6 月 30 日

お問合せ先
附属未来共創センター
E-mail: mirai-kyoso@hus.osaka-u.ac.jp

制作・印刷
株式会社一心社

大阪大学大学院人間科学研究科
附属 未来共創センター